

クロスロード

1



特集1

スポーツ分野の活動ポイント

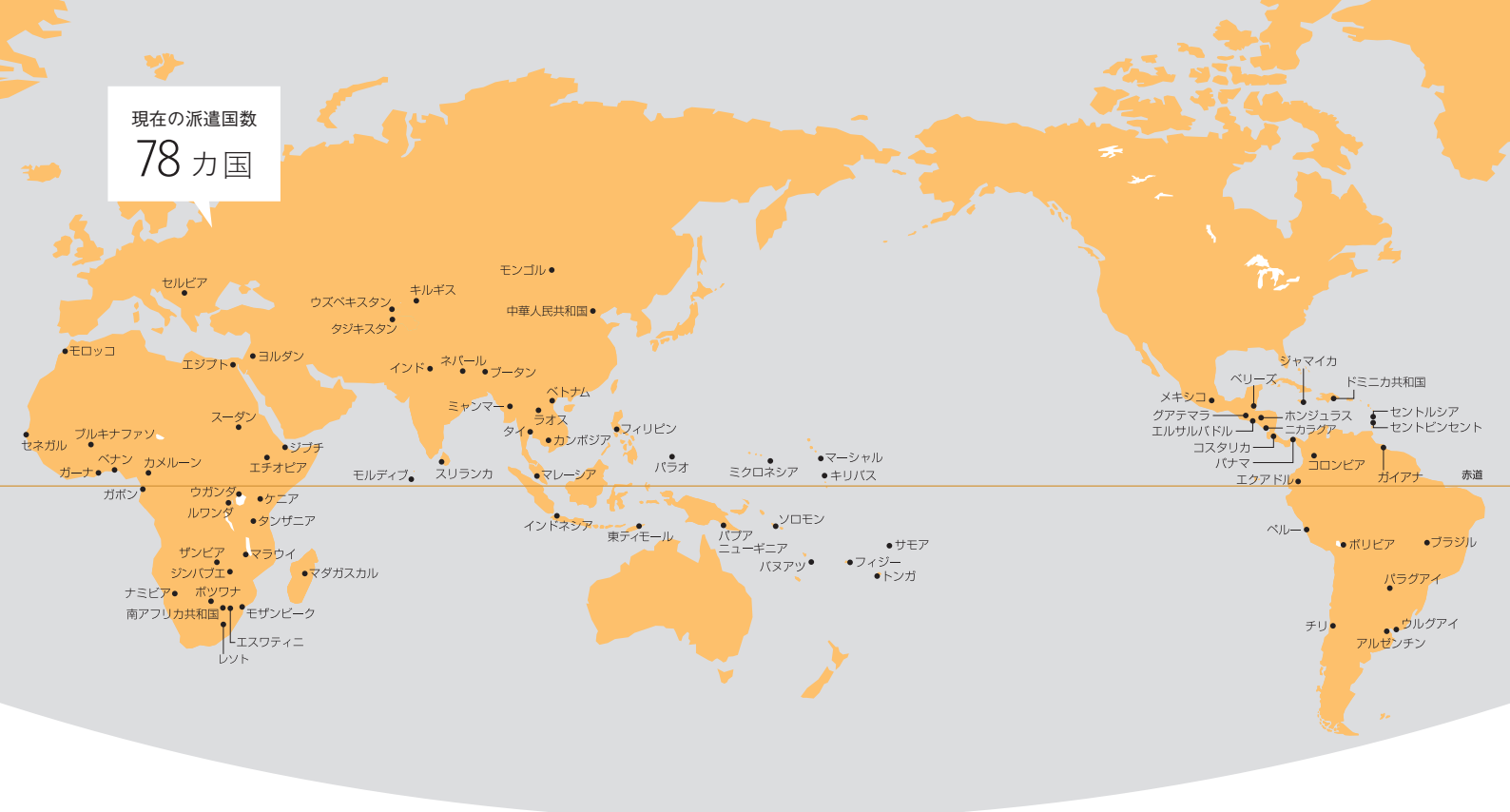
特集2

外部人材との協働



現在の派遣国数

78カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2018年11月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	55	4
エスワティニ	4	1
エチオピア	41	1
ガーナ	58	3
ガボン	18	9
カメルーン	19	9
ケニア	47	7
ザンビア	80	16
ジブチ	13	
ジンバブエ	8	
スーダン	33	
セネガル	49	3
タンザニア	55	2
ナミビア	15	
ブルキナファソ	16	
ベナン	53	
ボツワナ	14	1
マダガスカル	36	
マラウイ	77	
南アフリカ共和国	6	7
モザンビーク	43	2
ルワンダ	40	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	8	
インドネシア	15	2
ウズベキスタン	18	7
カンボジア	30	15
キルギス	30	
スリランカ	54	5
タイ	37	6
タジキスタン		2
中華人民共和国	12	
ネパール	45	3
東ティモール	32	
フィリピン	30	3
ブータン	22	5
ベトナム	44	23
マレーシア	24	8
ミャンマー	9	5
モルディブ	9	
モンゴル	39	
ラオス	38	5

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	9	
サモア	26	1
ソロモン	33	6
トンガ	14	2
バヌアツ	20	5
パプアニューギニア	29	4
パラオ	10	5
フィジー	28	4
マーシャル	9	4
ミクロネシア	11	9

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア		2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	16	3
モロッコ	17	7
ヨルダン	32	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		16	5	3
ウルグアイ		9		
エクアドル	52	7		
エルサルバドル	6	1		
ガイアナ		2		
グアテマラ	36	3		
コスタリカ	20	11		
コロンビア	14	16		
ジャマイカ	24	15		
セントビンセント	4			
セントルシア	9			
チリ	6	6		
ドミニカ共和国	40	8	4	1
ニカラグア	1	1		
パナマ	20	1		
パラグアイ	39	2	10	3
ブラジル			69	18
ベリーズ	16			
ペルー	44	6		
ボリビア	45	3	2	1
ホンジュラス	33			
メキシコ	1	10		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,941 (858/1,083)	315 (229/86)	90 (32/58)	26 (6/20)	2,372 (1,125/1,247)
累計 (男性/女性)	44,476 (23,708/20,768)	6,453 (5,224/1,229)	1,455 (555/900)	532 (246/286)	52,916 (29,733/23,183)

JV = 青年海外協力隊

SV = シニア海外ボランティア

日系JV = 日系社会青年ボランティア

日系SV = 日系社会シニア・ボランティア (単位:人)

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	4、18、36
環境教育	14
卓球	4
野球	28
サッカー	6、28
ウエイトリフティング	10
自転車競技	4
体育	1、4、8、28、36
小学校教育	4、16
料理	24
日系日本語学校教師	22
鍼灸マッサージ師	25
栄養士	20
ソーシャルワーカー	26

■国別索引	掲載ページ
ウガンダ	16
エチオピア	4
キルギス	8
グアテマラ	20
スーダン	4
スリランカ	18
セントルシア	14
タイ	26
バヌアツ	6
パラグアイ	10
フィジー	36
ブータン	1、36
ボリビア	22
ホンジュラス	25
モロッコ	24

■出身都道府県別索引	掲載ページ
千葉県	14
東京都	8、18
神奈川県	6、16、25
長野県	10
愛知県	20
三重県	24
大阪府	22、36
福岡県	26

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度1次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニア・ボランティア」の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY

レイアウト：S+M DESIGN FACTORY

印刷・製本：弘報印刷（株）

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶南スーダン難民キャンプにて、アート・スポーツを通じた平和教育を実施（エチオピア）
- ▶現地若者発信のWASH（水・衛生）啓発歌・寸劇の地方巡回公演をプロデュース（スーダン）

特集1

スポーツ分野の活動ポイント

6

CASE 1 スポーツを通じた人づくり

土屋圭悟さん（バヌアツ・サッカー・2016年度1次隊）

8

CASE 2 体育授業の充実化

矢内将洋さん（キルギス・体育・2016年度1次隊）

10

CASE 3 代表選手への技術指導

中野純平さん（パラグアイ・ウエイトリフティング・2015年度2次隊）

12

活動Q&A集

特集2

外部人材との協働

14

CASE 1 住民との協働

川口 恵さん（セントルシア・環境教育・2016年度1次隊）

16

CASE 2 保護者との協働

磯田晴香さん（ウガンダ・小学校教育・2016年度1次隊）

18

CASE 3 同業者との協働

岸野和樹さん（スリランカ・コミュニティ開発・2016年度1次隊）

20

CASE 4 他国ボランティアとの協働

杉浦美帆さん（グアテマラ・栄養士・2016年度1次隊）

22

“失敗”から学ぶ

門之園佳子さん（日系JV/ボリビア・日系日本語学校教師・2016年度派遣）

24

希少職種図鑑

- ▶料理 露口聖代さん（モロッコ・2015年度2次隊）
- ▶鍼灸マッサージ師 楽間優里香さん（ホンジュラス・2014年度4次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

介護職業訓練校の現地法人 職員 片岡希望さん（タイ・ソーシャルワーカー・2014年度4次隊）

28

OB・OG匿名座談会

スポーツ分野篇

30

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単浴衣帯の作り方/あるもので日本の味/写真を楽しむ

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「初対面」

35

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介



アートクラスにて貼り絵の説明をする橋本さん(左)と田邊さん(右)

開催までの流れ	
(2カ月前) 企画	国連開発計画とJICAスタッフとの間で難民キャンプでの支援活動を企画。
(1カ月前) 内容決定	参加者(プログラムに携わるJICA海外協力隊員)と活動内容が決定。
(1カ月前) 事前視察	2人の参加隊員(佐野・橋本)と国連開発計画・JICAスタッフで開催地を視察。
(前日) 開催準備	開催地近くの難民管理局にて、活動の認可を取得。
(当日) 開催	アートクラスは2週間、スポーツクラスは1週間にわたって実施。
(2週間後) 活動報告	JICAエチオピア事務所にて、国連開発計画・JICAスタッフに対し、活動報告会を実施。

南スーダン難民キャンプにて、 アート・スポーツを通じた平和教育を実施

Ethiopia

文 = 岡田真治さん(自転車競技)、佐野太一さん(卓球)、田邊一馬さん(体育)、橋本花織さん(小学校教育)
4人すべて派遣国はエチオピア、隊次は2017年度1次隊

私たちは、2018年8月23日から9月5日にかけて、エチオピア国内の南スーダン難民キャンプでの平和教育プログラムに、講師として参加しました。同年4月、日本政府がエチオピア国内の平和構築について、国連開発計画(UNDP)に対して50万米ドルを拠出したことが契機となり、UNDP・JICA共同企画として4人の隊員が派遣されました。本プログラムでは、アート及びスポーツのクラスに分かれ、それらを通じた平和教育を難民キャンプ内の小学校で実施しました。

アートクラス担当隊員(田邊・橋本)は、2週間滞在し、全14クラス300人の子どもたちとアート制作をしました。「Peace x Piece」をテーマに掲げ、世界の平和を願うデザイン画を32のバスルピースにし、4枚のアートに仕上げました。作品は難民キャンプ内の4つの小学校に飾られています。読み聞かせでは、南スーダンやエチオピアだけではなく、世界には多様な文化や言語をもった人々が



岡田さんと佐野さんが担当したスポーツクラスでの集合写真

いること、それぞれが違った価値観をもっているが、まずはそれを知ることが大切だというメッセージを伝えました。また、日頃の活動でも行っている環境・衛生教育を普及するために、街中のゴミを利用した貼り絵を実施したほか、作業を終えた後には全員で教室を掃除し、最後に手洗いソングを教えるという工夫も加えました。

☐

開催までの流れ	
(6.7カ月前) 現状把握・企画	州市周辺貧困地域5カ所でのニーズ調査を基に活動戦略を策定後、企画書を作成。
(4~6カ月前) 作詞・作曲・撮影・YouTube配信の内容助言と補助。対象村落との調整と機材手配。	
(1~4カ月前) 村落巡回準備	現地若者グループ2組と3村落で巡回公演実施。最終舞台開催へ向け、各省市・民間企業と交渉。
(1~4カ月前) 村落巡回実施・最終舞台準備	最終調整に丸々1週間、事前準備に当日丸1日を費やした。
(〜開催時間) 最終調整	市内人気スポットのナイル川沿いで開催。
(当日) 最終舞台実施	
(1週間後) 長距離バス会社配信	バス内配信承諾は5カ月前に取得済みだったが、USB手配に時間がかかり、ようやく配布を完了。



同僚と協力して、村落巡回時に参加者の子どもたちや母親に対し、WASH啓発をする富田さん(右)

現地若者発信のWASH(水・衛生)啓発 歌・寸劇の地方巡回公演をプロデュース

Sudan

文 = 富田奈々世さん(スーダン・コミュニティ開発・2016年度3次隊)

正しい方法で、正しいときに手を洗う、その少しの心掛けが皆の健康と幸せにつながる。このメッセージを限られた資料の中で、いかに効果的に発信するか。将来を担う若者達の地域開発参加を、どう促進させるか。私はこれらの問題の解決策立案と実施を、配属先のジャジーラ州水公社水環境衛生部の戦略的PR活動として行いました。配属先は、安全な地方給水と衛生環境向上を通じ、子どもと母親の心身を健康にすることを目標にしています。

実は現配属先に着任したのは残り任期10カ月のときでした。前任地から任地変更してすぐのタイミングだったため、できる限りのことに楽しく取り組もうと決めました。PR活動着手にあたり、まずは現状把握のため、配属先が過去に提携したNGOに連絡し、難民キャンプを含む貧困村落を訪問。経済的理由などで村落外移動が困難なことや、教育・娯楽機会の少なさが明確になった一方で、子どもと母親が日常生活内で水と衛生に最も近い位置にいても確認できました。

この現状を、新任地に赴任して間もないころ偶然出会った2組の現地若者アーティストグループに伝えるところ「一緒に楽しく意義のある何かをつくろう」と合意。こうして彼らとのWASH(Water, Sanitation and Hygiene)歌・ビデオの制作が始まり、歌詞の意味合いや、楽曲ジャンル、撮影詳細などを共に考えました。作詞・作曲・録音は2週間で完了しましたが、撮影用Tシャツの作成や機材調整

に1カ月半以上を要し、オンライン配信まで約3カ月かかりました。WASH歌の制作費は、配属先予算を充てるのが難しい状況でしたが、この活動に多大なる理解を示してくれた配属先代表が他州の代表に交渉してくださり、青ナイル州水公社水環境衛生部の協力を得られました。また、寸劇公演と併せて行った子ども約700人と母親約100人への3村落巡回公演にはJICA現地業務費を、市内での最終舞台には配属先予算を充てました。

10月15日の「世界手洗いの日」に開催予定の最終舞台は、調整不備や予算確保遅延で延期されたものの、11月頭に開催することで11月19日の「世界トイレの日」への意識向上も兼ねる結果に。当日は各省市も招待し、幼稚園児による手洗い手法実践歌斉唱、ビートに乗せた手洗い手法の実践、現地石鹸工場提供の巨大石鹸写真撮影ブースなどを盛り込み、「楽しく新鮮で盛大な活動」と報道されました。

大雨やラマダンによる業務停滞、言葉の壁による決断ミスなどトラブル続きでしたが、失敗から学びつつ、私自身も度胸と愛嬌で体当たりしました。「美しい仕事だった。あなたが来たからできた。WASH最高!」と、若者や同僚から言われたときの達成感は生涯の宝物です。

今後、長距離バス内での配信と配属先の保健省隊員を通じた省庁間提携を基に、当活動が任地内外を問わず親しまれ引き継がれることを願います。

☐

※YouTube検索「WASH SONG GEZIRA」



つちやけいご
土屋圭悟さん

(バヌアツ・サッカー・2016年度1次隊)
の事例

Profile

1994年生まれ、神奈川県出身。幼稚園児のころにサッカーを始める。日本体育大学を卒業すると同時にサッカー選手を引退。2016年7月、協力隊員としてバヌアツに赴任。18年7月に帰国。

活動の概要

ポートビラ市役所に配属され、サッカーを通じた青少年育成を目標のひとつに、以下の活動に従事。

- 知的障害者のサッカーチームの立ち上げ
- 小学生のサッカーチームでの指導
- サッカー大会の企画・運営

- 1 土屋さんが指導をしたサッカーのモデルチームの選手たち
- 2 丸太でサッカーゴールを手づくりする成人チームの選手たち
- 3 路上で開催した「ストリートサッカー」の大会。競技の普及方法として土屋さん(中央)が提案したものだ



特集1

スポーツ分野の活動ポイント

スポーツ分野の活動には、「活動を広げていくために、どうやって意欲・関心を持ってもらうか」「スポーツを通じた人材育成の重要性について、いかに理解を得るか」など、共通する困難がある。本特集では、同分野の事例を集め、隊員たちが直面する典型的な困難の乗り越え方を考えてみた。

知的障害者チームの立ち上げ

任期の半ばになると、前半に重ねた地道な活動が元となって、新たな活動が生まれていった。そのひとつが、知的障害者によるサッカー・ナショナルチームの指導だ。

その時期、バヌアツが「スペシャルオリンピックス」に加盟したのを機に、知的障害者の支援に取り組む同国のNGOが「サッカーを足がかりに、知的障害者スポーツの普及を目指す」という構想を温めていた。しかし、指導者の獲得が難航。そんななかで白羽の矢が立ったのが土屋さんだった。土屋さんはそれまで、障害者施設でラグビーの指導に携わっていた。その情報が人づてにNGOに届き、指導のオファーが寄せられたのだった。「ナショナルチーム」という名目ではあったが、サッカーができる知的障害者はまだ限られた範囲に留まっていた。オファーに応じた

土屋さんは、まずは「知的障害者の交流の場づくり」を目指した。練習は、学校のグラウンドを借りて、週3日ずつ行うことに。「選抜」などはせずに、興味があれば誰でも受け入れる構えで開始した。やがて、毎回楽しみにして練習にやってくる参加者たちの姿が定着。サッカーの素養がなかったNGOスタッフたちも運営の要領をつかみ、このチームは土屋さんの任期終了後も継続されることとなった。

子どもの主体性を伸ばす指導を

教育機関や教育施設での活動を通じて、土屋さんには同国のサッカー協会とのつながりが生まれた。すると、協会と配属先の双方に協働の希望があることが判明。そうして土屋さんは、サッカーの普及とそれを通じた青少年育成という、両機関の事業目的を兼ね備えた活動に取り組むこととなった。それはサッカーの小学生チームの巡回指導と、チームづくりの理想を示すために「モデル」と位置付けられたチームでの継続的な指導だった。協会が各地に小学生チームをつくり、そのリーグを立ち上げたのは、土屋さんの任期が

残り半年となったころ。土屋さんがモデルチームの指導で重視したのは、子どもたちの「自主性」を伸ばすことだ。それまで見てきた同国のスポーツ指導の現場では、「大人が指示し、それを待って子どもが動く」というやり方が一般的だった。そうしたなか、土屋さんは周囲のスポーツ関係者が注目するモデルチームを使って、彼らにスポーツの教育的側面に気づいてもらおうと考えたのだった。

土屋さんはモデルチームでメンバーにこう伝えた。「まず自分たちで考え、良いと思ったとおり実践してこらん。考えてもわからなかったら、質問しても構わない」。そうして「子どもが主体」のチームづくりが開始すると、当初こそ、どう動けばいいのかわからずにとまどっている様子の子も多かったが、次第に「自分たちで考えること」にトライシ始める。準備運動や後片付けなどの段取りを自分たちで考え、行うようになっていったのだ。

子どもたちの自主性の成長は、プレーの中でも顕著に現れるようになっていった。試合では相手チームの指導者がしきりに激を飛ばすなか、土屋さんは子どもたちの自主性を尊重し、指示は控えめにするよう努めた。する

CASE 1 スポーツを通じた人づくり

小学生サッカーチームで自主性を伸ばす指導を実践

サッカーの普及や、その指導を通じた青少年育成に携わった土屋さん。

新たに結成された小学生のモデルチームでは、子どもの自主性を伸ばす指導に努めた。

と、ベンチのムードは明るいものとなる。やがて、子どもが自分たちで試合の状況を分析し、作戦を立てたり、声かけをし合ったりしながら、勝利に向けて協力し合うようになる。そうした戦い方は、チームの強さにもつながっていた。

モデルチームの子どもたちのそうした姿を「証拠」として、土屋さんはほかのチームの指導者たちにこう説明した。「指示を出すことも時に必要です。しかし、子どもたち自身で問題を解決できるようにした方が、チームは強くなる。プレーをするのは指導者ではなく、子どもたち自身なのだから」

スポーツは多面的なものだ。スキルを伸ばし、競う「競技」の側面もあれば、取り組む過程でさまざまなことを学べる「成長の機会」という側面もある。バヌアツのスポーツ指導者や選手の保護者たちが従来、関心を持っていたのは、前者の側面。そのなかで、後者の側面もあるのだと一石を投じたのが土屋さん。任期を終えた後、その波紋が広がり、同国のスポーツがより豊かになるものになっていくことが、土屋さんの願いだ。

※スペシャルオリンピックス…知的障害者にスポーツをする機会やその競技会を提供している国際的なスポーツ組織。

事例のポイント！
行動範囲を広げる

土屋さんは任期の序盤、教育施設などを積極的に訪れたことで、活動の場を獲得し、さらにそれが自分のスキルを発信することにつながっていった。活動先や協力者が定まらない場合、思い切って行動範囲を広げてみるのも手だろう。



① 配属校の体育授業でドッジボールの指導をする矢内さん(右)
 ② 朝礼で「カラジョルゴ(キルギスの伝統的な踊り)体操」を行う配属校の児童たち。健康増進を目的に矢内さん(右)が考案したもの
 ③ 帰国前に配属校で開催した運動会の様子。教員と児童が3チームに分かれて競い合い、大盛り上がりとなった



CASE 2

体育授業の
充実化

「ドッジボール」を突破口に 体育授業の質向上を支援

小・中・高の一貫校に配属された矢内さん。
「自由時間」と化していた体育授業の改善を目指し、
限られた環境でも実施可能な「ドッジボール」の導入を提案した。



やないしょうよう
矢内 将洋さん
(キルギス・体育・2016年度1次隊)
の事例

Profile

1994年生まれ、東京都出身。日本体育大学を卒業後、2016年7月に協力隊員としてキルギスへ赴任。18年7月に帰国。現在は保健体育科の教員を目指している。

活動の概要

ナルン州ケリンバイ学校に配属され、主に以下の活動に従事。
 ● 体育授業の補助
 ● ドッジボールの普及
 ● カラジョルゴ体操の製作・定着化
 ● サッカークラブの立ち上げ
 ● 日本クラブの運営

矢内さんが配属されたケリンバイ学校は、小・中・高の一貫校。午前と午後の二部制で、およそ300人の生徒が在籍していた。矢内さんに求められていた活動のひとつは、小学校の体育授業の質向上支援。着任すると早速、カウンタートパート(以下、CP)の体育教員が行う授業に入らせてもらうこととなった。当時、体育授業は「自由時間」の様相を呈していた。CPがボールをひとつ与えると、児童たちはルールも曖昧にサッカーなどを気ままに楽しむ。そうした状態に対し、CPは問題意識を持っていないようだった。「学びのある体育の授業」をCPに知ってもらうべく、矢内さんは早速、試行錯誤を始める。授業の「始まり」を意識させるため、冒頭に「準備体操」の時間を置いたり、球技以外の運動を取り入れたりと、日本の体育授業のあり方を自身が主体となって実践してみた。しかし、CPは関心を示す素振りもなく、意見を求めても「暖簾に腕押し」の状態だった。「しかし、CPは体育教員としてのキャリアが20年以上もあるベテラン。若手の自分が意見するのは得策とは思えなかった」と矢内さんは振り返る。

授業に楽しそうに取り組む児童たちの姿に

はやりがいを感じたものの、矢内さんの懸念は消えなかった。このまま自分が主体となった授業を続けていても、体育授業の質の向上は望めなかった。そうしたなか、矢内さんは問題点とその解決策を整理し直すため、授業実践からいったん身を引き、しばらくサッカークラブの指導に専念することにした。着任後半年のころだ。サッカークラブの指導も、学校から当初、要望されていた活動のひとつだった。

ドッジボールを突破口に

体育授業の新たな改善策を閃いたのは、授業実践から離れて半年ほど経ったころだった。「ドッジボール」を突破口にするというアイデアである。この種目を選んだのは、次のような理由からである。

- ボールひとつで実施が可能。
- 体格や運動能力などに差があっても不利になりにくく、男女を問わず活躍できる。
- 作戦がわかりやすいため、目標に向かってチームが一丸となれる。
- 「ぶつける」「逃げる」など、楽しめる要素が含まれている。

● CPが知らなかった種目であるため、関心を持ち、授業に取り入れる可能性がある。経験がない相手に競技の仕方を伝えるためには、事前準備が重要になる。矢内さんは現地語のルールブックを作成し、わかりにくい箇所は図で解説するなどの工夫を施した。すると、矢内さんの狙いは的中。CPや児童たちからの反応がよく、すぐに体育の授業に導入される運びになったのだ。ついに「自由時間」から脱却し、「学びのある体育の授業」が実現したのだ。

グループで巡回指導を開始

ドッジボールがCPや生徒たちの心を掴み、手応えを感じた矢内さんは、他校へのドッジボールの普及を画策。スポーツ関連の隊員で分科会を立ち上げたうえで、「体育授業への導入」と「大会の開催」という2つの目標を掲げ、各校への巡回指導を開始した。任期も残すところ1年を切った時期である。巡回先は小学校12校。それぞれ2回ずつ訪問した。指導の内容は次のとおりだ。

【初回】ドッジボールの紹介と大会への出場を提案。大会については、「ルールの理解と練習に努める」という出場条件を提示した。
 【2回目】授業への導入の進捗状況と大会出場の意思を確認。授業への導入の進捗状況や教員の意欲などを総合的に判断したうえで、出場校を確定した。

初回の訪問でドッジボールを紹介する際は、分科会メンバーで役割を分担。「説明する役」と「実演する役」をつくり、動きや手本を示しながらルールを説明したところ、教員たちの理解が得やすかった。また、試合の様子を伝えるときには、動画も活用した。

「6年生」「1チーム15人」という規定で開催した初めてのドッジボール大会は、9校が出場。夢中で試合に取り組む児童たちと、熱心にアドバイスを送る教員たちの姿があった。ルールの浸透具合から、教員たちがドッジボールを実際に授業に導入し、練習を積ませてきたことがうかがえた。なかでも分科会のメンバーが大きな成果として実感できたのは、児童たちの変化だった。チームワークが肝要なドッジボールを通じて協調性を身に付けた児童たちが、他校の児童とも打ち解け合い、後片付けを協力して取り組む姿なども見られたのだ。

分科会によるこのドッジボールの普及活動で、矢内さんはもうひとつの成果を得ていた。CPが巡回指導に同行し、他校の教員への説明に加わってくれたことだ。それにより、正確な現地語による説明で受講する教員たちの理解が深まっただけでなく、CP自身も体育教員としての自信や誇りを新たにすることができたのだ。ドッジボールを通じて生まれた、学校を超えた現地の教員間のネットワーク。矢内さんは、それが自身の帰国後も体育授業の質向上に生かされていくことを願っている。

事例のポイント! いったん距離を置く

活動に行き詰ったときは、いったんそこから距離を置いてみるというもひとつの方法だろう。本事例では、距離を置いた期間にあらためて問題点を整理・分析したことで、「ドッジボール」という解決の糸口が見つかる結果となった。



なかの じゅんべい
中野 純平さん
(パラグアイ・ウエイトリフティング・
2015年度2次隊)
の事例

Profile

1991年生まれ、長野県出身。松本大学卒業後、2015年10月に協力隊としてパラグアイに赴任。18年1月に帰国し、公益社団法人日本ウエイトリフティング協会に勤務。

活動の概要

パラグアイ・ウエイトリフティング連盟に配属され、ウエイトリフティングに関する以下の活動に従事。

- 配属先のジムに通う選手への技術指導
- 国際大会への選手の引率
- 公演などを通じた普及活動

個別の練習メニューで対応

パラグアイの選手たちには、「パワー」という強みがある反面、「瞬発力」や「柔軟性」などが弱みとなっている傾向があった。選手たちは強みをさらに伸ばす練習には積極的に取り組むが、弱みを克服する練習は避けようとする。中野さんは、体が硬い選手に「ストレッチをするべきだ」と繰り返し伝えるなど、口頭で意識改革を促そうとしたものの、相手になかなか変化は見られなかった。

そうしたなか、彼らの意識を変えるための策として試みたことのひとつは、選手ひとりひとりに合った個別の練習メニューを毎月作成し、課題の「見える化」を図ることだ。練習メニューの作成にあたって工夫したのは、選手の置かれた環境に合ったものにする。選手たちはいずれも、仕事を持つが、学校に通うかしており、それらの空き時間を使ってウエイトリフティングに取り組んでいる。そのため、どれくらいの時間、練習に取り組めるかは、その日になってみないとわからない。そこで中野さんは、練習メニューの自身を「必ず取り組むべきもの」と「時間が足りなければ省略しても構わないもの」に区

CASE 3

代表選手への
技術指導

個別の練習メニューを軸に
練習に対する意識改革を促進

パラグアイ・ウエイトリフティング連盟に配属された中野さん。「弱みを克服するための練習」には消極的だった選手たちに対し、個別の練習メニューを作成し、練習に対する意識の改革を図った。

分。与えられた時間で最大限の効果が生まれるよう工夫した。

練習に対する選手たちの意識を変えるために中野さんがとったもうひとつの策は、「現在の自分の力」をしっかり把握させることだ。従来配属先では、選手たちがそれぞれ練習中にどれくらいの重量を上げたかは、指導者がメモしていた。しかし、それを選手たちに示し、共に課題を探る作業などをしていなかった。一方、中野さんは各選手に対し、月のベスト記録の推移を示しながら、翌月の練習メニューのポイントを説明していった。

以上のような「個別の練習メニュー」を軸にした指導方法により、選手たちの意識も徐々に変化。弱みを克服する練習への積極性が見られるようになっていったのだ。

大会は情報収集の好機

教え子たちが国際大会に出場するチャンスが訪れたのは、着任の約1年後だ。南米で開かれたジュニア選手権である。教え子の大多数は、国際大会に出場した経験がなかった。にもかかわらず、国内の他選手との比較から過剰に自信を持つ「井の中の蛙」の選手もいた。中野さんは、この大会への出場で「世界との差」を痛感し、成長の糧にしてみらおうと期待していた。ところが、中野さんの予想に反して、個人で3位という好成績を上げたのだった。期待とは違う結果となったが、この大会は予期せぬ影響があった。大会後、中野さんのコーチングが的確だと、選手たちからの信頼が増したのだ。

国際大会出場は、ほかにも重要な収穫があった。引率した中野さんは、参加した他国

の一流コーチたちと積極的にかわり、情報を交換。中南米の選手に有効な練習方法などを知ることができ、その後の練習に反映させることができた。以後、選手たちの記録は如実に向上。半年に平均で10パーセントという伸びを見せたのだ。

任期終了が近づくとつれて重要になっていくのは、自身の任期が終了した後のために何をすべきかという点。中野さんが心がけたことのひとつは、選手たちが独力で練習を重ねられるよう、「正しいフォーム」を繰り返し教え、それが揺るがないようにすることだ。さらに中野さんは、練習の「管理方法」についても選手たちに伝えるよう努めた。練習メニューをどのような理論的根拠を基につくっていくか、あるいは各練習方法にはどのような目的があるかなどを、ひとつひとつ選手たちに説いていったのだ。

『土砂降りの雨でもトレーニングを欠かさない』とも言えるべきほどの向きがあった。中野さんは教え子たちをこう振り返る。そうした資質をベースに、やがてパラグアイのウエイトリフティング界をけん引する指導者が教え子のなかから生まれることを、中野さんは期待している。

事例のポイント！
大会で情報収集を

スポーツ指導を行う隊員は、大会に選手を引率する機会がある場合も少なくないだろう。大会は、隊員自身が視野を広げる格好のチャンス。他の指導者と積極的に情報交換することで、現地の選手たちの特性などが見えてくるかもしれない。



①②③ 大会で教え子のサポートをする中野さん。①は試合に臨む選手に気合いを入れる中野さん(左)。②は試合前に選手の体のケアを行う中野さん(右)。③ウォーミングアップでフォームの確認をする中野さん(右)
④パラグアイの選手たちと中野さん(後列中央)

活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

Q1

運動会を
開催する際の
留意点とは？

小・中学校で活動する
体育隊員より

アフリカ地域の多くの学校では学校体育が名ばかりで、現地の先生も体育の楽しさを体験できておらず、価値を十分に認知しているとはいえない状況です。

そこで、子どもたちに運動の機会を提供しつつ、先生に体育の意義を伝える目的で運動会を実施できないか、現地の先生と話し合っています。実施する以上は、隊員が帰国後も持続可能な運動会にしていきたいと考えています。運動会を開催することのメリットとデメリットだけでなく、運動会開催を契機にこれまでの隊員がその後の活動をどのように行ったのかなど教えていただきたいです。

Answer

運動の楽しさを知るうえで、みんなが参加する運動会を開催することは一つの有効な手段といえます。しかし、いくつか留意しなければならぬ点があります。一つ目は、現地に合わせた運動会を考案すべきで、日本のものを移植しようと考えてはいけません。必ずしも受け入れられません。背景として、運動に対する意識や宗教、文化、環境が大きく異なるからです。

もう一つの理由は、自立して実施できるようにしたいからです。自分たちで考案したものならば大切にします。移植するのは、あくまで趣旨や実施方法です。

そこで、大切な2つ目は、5W1Hをはっきりさせて行うことです。何のために、いつ、どこで、だれが、なにを、

どのようにするのかを明確にして進めることです。ここまですべて具体的に実施しなければ、組織的に運営できません。役割を明確にして行うことで、自覚が生まれます。

3つ目は評価をきちんとすることです。運動会が無事に終わりよかつたと安堵し、余韻に浸ることも大切ですが、その後、実施体制、活動計画、内容、役割分担、費用、そして何より現地の人々の満足度について評価することです。うまくできたことは十分賞賛し、改善点は明確にしたいうえで、次年度の改善計画を立てます。その際、次回はどこまで任せられるのか、隊員の撤退計画を立てます。最終的には現地の教員や地域で実施していけるように、任せられることは任せていきます。大きなイベントを成功させることも自ら取り組む意欲につながります。こうして、自分たちでできそうだと認識してもらうことで、運動会にとどまらず、体育の授業への自信にもつながっていきます。

Q2

実習生を対象に
研修会を行う場合の
留意点や効果的な
方法は？

教育実習生の受け入れ小学校で
活動する体育隊員より

現在、教員養成校の実習先である小学校を拠点に活動しています。普段はこの小学校で授業を実施しています。現地教員と協力して体育の授業を行っています。今後、教育実習として養成校の学生が来るのですが、現地では体育の実習はほとんどできていません。そこで、実習生を相手に研修会を行いたいと考えているのですが、学校の先生や学生を対象にした研修などを実施する場合には、どのような点に留意し、どのような研修を行うと効果的であるのか、それがわかるような優良事例はあるのでしょうか。

Answer

開発途上国では、体育科教育に対して、あまり意識が高くない現状があります。そこで、はじめに体育の価値を高めることが必要です。研修時間がどれほどあるのかにもよりますが、押さえておきたいのは、①「運動することの楽しさや意義を共有すること」、②「体育の目標・内容を知ること」、③「具体的な指導法を知ること実践すること」です。

①については、まず、一緒に運動をして楽しむ機会を作ると効果的です。その際、誰でも楽しめ、すぐにできる易しい運動、そしてふれあいのある運動を選択することが肝要です。簡単なゲームを扱うのも効果的です。きつとみんなが笑顔になることでしょうか。そこで、みんなが楽しめた訳を考えます。「易しい運動だったので、達成感が味わえたこと」「関わりながら運動できた

こと」「勝つためにチームで工夫したこと」などが挙がるでしょう。それらが体育の意義でもあります。このように体育では、楽しさを体験すること、体育の意義を頭・心・体で理解できます。

②では、授業で何を伝えたいかを確認します。各国には学習指導要領が作成されていますが、中にはその国の現状に即していないものもあります。その場合、日本の学習指導要領をベースに進めるとよいでしょう。日本に限らず、世界的に体育の究極的な目標は豊かなスポーツライフです。つまり、各自に応じた生涯スポーツです。生涯にわたって自分に合った運動を続けられるようにしたいのですから、いかに運動が好きになれるか、そこに向けて授業を創造できるかが大きなポイントです。運動が好きになる

ためには、楽しさを感じられることが重要です。そこについては、①の研修で感じているので、それらの要素が含まれるように授業を考案します。そして、仕上げは③になります。グループで考えた授業の1時間を実際、模擬授業として実施し、振り返ります。さらに改善した授業を実施し、よかった点を賞賛します。このように楽しさから入り、成就感が味わえる研修が受講者の自信（効力感）を高めます。2回目の研修には各自が実践した授業を持ち寄ると、発展的で具体的な協議ができます。

「スポーツ・フォー・トゥモロー (SFT)」 とJICA海外協力隊

SFTとは、東京2020年オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて日本政府が実施する、スポーツを通じた国際貢献事業のこと。2014年から20年までの7年間で、途上国を含む100カ国以上で、1000万人以上を対象に活動することを目標としています。SFTコンソーシアムの運営委員を務めるJICAは、JICA事業を通してSFTを推進する立場にあるため、協力隊員が派遣国で実施するあらゆるスポーツ活動が、SFT事業の実績としてカウントされます。1965年の協力隊派遣当初から2018年3月末で、88カ国に延べ4184人が体育・スポーツ職種の隊員として派遣されており、そうした実績と経験が、SFTプログラムにJICAが協力する背景のひとつとなっています。

<https://www.sport4tomorrow.jp/jp/>

外部人材との協働

「時間がない」「関心がない」「知識がない」——。協力隊員は、こうした理由で配属先の同僚たちに活動への協力を期待できないケースもある。そこで重要となってくるのが、配属先外で代わりの活動パートナーを獲得することだ。ここでは、配属先外の人材の力を有意義に活動に取り込んだ事例を集め、そうした活動方法で重要となる点を探ってみた。



1 任期中の最終回となった「クリーンアップ」の参加者たち。協力隊員と住民を合わせると50人ほどにのぼった
2 「クリーンアップ」の終了後、Aさん(右端)に仕事への思いを参加者に伝えてもらった。「自分は忍者。陰から社会を変えたい」が彼の口癖だった
3 プラスチック袋使用削減のポスターコンクールの審査会場

半ばごろ。現地でもリサイクル業を営む40代の男性(以下、Aさん)である。環境問題の解決を目指すソーシャルビジネスとして起業した人で、海外の先進的な取り組みを視察するなど勉強も重ねていた。JICAに関する知識もそれ以前から持っており、川口さんの存在を聞きつけたAさんが、「一緒に何かをやらう」と自らコンタクトしてきたのだ。

ゴミ拾い活動が住民主体に

Aさんの協力がカギとなった活動は、月に1度、住民有志で街中のゴミを拾う「クリーンアップ」と称した取り組みである。

クリーンアップ自体をスタートさせたのは先輩隊員。川口さんは、着任直後から毎回これに参加するようになったが、当時の参加者は協力隊員が大半という状態だった。そうしたなか、着任の2カ月後に先輩隊員の任期が終了。住民主体の取り組みへと変えることができれば、環境問題に関する良い啓発になる——。そう考えた川口さんは、幹事役を引き継ぎ、参加する住民を増やすための策を試みるようになった。「開催時間を変える」「募集の仕方を変える」といった方法だ。しかし、これといった効果はなかなか現れなかった。

その潮目を変えたのが、Aさんとの出会いだった。彼はまず、拾ったゴミの引き取りを請け負ってくれるように

なった。さらに、「参加する住民を増やしたい」という川口さんの相談に対して、Aさんは「スポンサーの獲得」を提案。地元企業の協賛により、参加者への特典を設けるというアイデアだった。Aさんはさらに、協賛の依頼をする際に相手企業に示す企画書の書き方なども伝授してくれた。

結果は期待どおりだった。カフェやダイビングショップなど、毎回異なる企業が順にスポンサーとなり、その店の割引券などを特典として参加者に配布するというスタイルが定着。ささやかな特典ではあったが、「参加すると楽しい」という雰囲気も醸成され、平均で15人ほどの住民が参加し、2000個近くのゴミを拾うという規模の取り組みになったのだ。

ポスターコンクールを開催

川口さんの任期終盤は、小・中学校の環境クラブの活性化を支援することがメインの活動となった。そこでもやはり、営業活動を通じて関係を結んでいた配属先外の人材がパートナーとなった。中央省庁の水産分野を所管する部署に勤める女性職員(以下、Bさん)である。

セントルシアでは、川口さんの任期終了の1カ月後に、スーパーのプラスチック袋が有料化されることが決まっていた。環境保護の目的で、その使用量の削減を狙った施策である。しかし、これには現地の大人たちから強い反発

川口さんの配属先、セントルシア持続的開発・エネルギー・科学技術省の持続的開発・環境局は、環境分野全般の政策決定機関。環境教育の実施も担っており、その活発化が川口さんに求められていた役目だった。同局のスタッフは十数人。それぞれに「環境アセスメント」や「気候変動」などの担当分野が割り振られていたが、「環境教育」はそうした割り振りの対象外だった。政策決定に関する業務の合間に、おのおのが自分の担当分野に関する環

境教育を実施することになっており、川口さんの着任当時、どうしても後回しにされがちだった。カウンタートパートはいたものの、やはり他の業務で多忙を極めており、共に環境教育に取り組んでもらえる余地はなかった。

「活動をつくるためにも、とにかく地域の人の接点を持ち、活動のパートナーを見つけなければ。そんな焦りから、川口さんは体当たりの営業活動を開始する。手始めに行ったのは、地域の小学校へのアプローチだ。小学校は

環境教育が実践しやすい場だと考えた川口さんは、片端から電話をかけていく。しかし、まだ英語が不慣れななか、電話での交渉は至難の技。しかも、外国人からの突然の電話ということでも、まともに取り合わない学校もあった。

そこで今度は、小学校を直接訪ねてみることにした。すると、一部の校長が協力する姿勢を見せてくれた。そうして着任のおよそ半年後になり、ようやく3校で週に1度の定期的な環境教育授業を行わせてもらえるようになったのだ。

「顔を売る」努力

「ネットワークづくりは、直接顔を見ながら話をすることが重要だ。活動校の開拓でこれを実感した川口さんは、「顔を売る」ことをより積極的に言うようになった。そのひとつは、現地の環境問題に関する情報収集を兼ねて行った関連機関への訪問だ。対象は、ゴミ処理業者や環境NGOなどである。

川口さんがとったもうひとつの「顔を売る」方法は、地域のイベントへの参加だ。たとえば、現地では特に人気で、年に何度も開かれていたウォーキングイベント。日本人がそうした場にいればおのずと目立つ。毎回参加していくなか、やがて見知らぬ人から声をかけられることも多くなっていった。

こうした営業活動の積み重ねが実を結び、もつとも重要な活動パートナーとなる人物とつながったのは、任期の

省庁の環境部門に配属され、環境教育の活性化に取り組んだ川口さん。環境教育に取り組む余力が同僚たちになく、活動パートナーとつながることは、環境問題への高い意識を持つ住民たちだった。

思いを共有できる住民と共に環境啓発プログラムを実施



CASE 1
住民との協働
かわくち めぐみ
川口 恵さんの事例
(セントルシア・環境教育・2016年度1次隊)

川口さん基礎情報

PROFILE

1990年生まれ、千葉県出身。学習院大学文学部英語英米文化学科を卒業後、進学塾で3年間、文系講師として働く。2016年6月、協力隊員としてセントルシアに赴任(現職参加)。18年6月に帰国し、復職。

活動概要

- 持続的開発・エネルギー・科学技術省持続的開発・環境局に配属され、主に以下の活動に従事。
- 小・中学校における環境教育授業の実施
- 中学校におけるコンポストづくりの導入
- 住民ボランティアによる定期的な清掃活動の運営
- スーパーのレジ袋の有料化支援

そこで今度は、小学校を直接訪ねてみることにした。すると、一部の校長が協力する姿勢を見せてくれた。そうして着任のおよそ半年後になり、ようやく3校で週に1度の定期的な環境教育授業を行わせてもらえるようになったのだ。

「自分のペース」で大丈夫!

活動らしい活動が見つからず、時間が長く感じられて仕方がないという方も、焦る必要はないと思います。大切なのは、そういう時期であっても、「この国を楽しもう」と意識し、どんどん地域に出ていくこと。そこから、思いを共有できる人とつながったり、たとえそれが叶わなくても、良い気分転換ができたりするからです。

川口さんからのメッセージ

磯田さん基礎情報

PROFILE

1992年生まれ、神奈川県出身。日本女子大学家政学部児童学科を卒業後、2016年6月、協力隊員としてウガンダに赴任。18年6月に帰国後、英国リーズ大学大学院「開発と教育」コースに進学。

活動概要

ルウェロ県ンデジェにある公立小学校、ナリニヤルワンタレ・ガールズスクールに配属され、主に以下の活動に従事。

- 算数授業の実施(単独で)
- 体育授業の実施(現地教員との協働)
- 課外活動(アルティメットクラブ)の支援

1 アルティメットクラブで授与された「がんばった賞」の表彰状と大会の参加証を手にする5年生の児童とその母親。学業の成績は下位だったが、クラブでの活躍を理解した母親は、長い目で成長を見守る姿勢へと変わっていった

2 他校で行われたアルティメット大会で活躍する配属校の児童。この子も留年するほどの成績だったが、クラブでは人一倍努力。小柄ながら、女子のなかでもっとも上手な選手になった

3 洗ったばかりのアルティメットディスクを手にするクラブの部員たち



保護者との対話で「過程」への着目を促す

小学校で算数や体育、課外活動の支援に携わった磯田さん。「成績」の良し悪しばかりを気にする保護者が多かったなか、勉強の「過程」やクラブ活動への取り組み方など、児童の「人間としての可能性」を多角的に見るよう訴えていった。



CASE 2

保護者との協働

磯田 晴香さん
(ウガンダ・小学校教育・2016年度1次隊)
の事例

磯田さんの配属先はウガンダの公立小学校。7学年のいずれも児童数は100人程度で、成績により2クラスに分けられていた。各クラスに担任は配置されていたが、授業は教科担任制。教員がそれぞれ得意・不得意によって1〜複数の教科を分担していた。

磯田さんの主たる活動のひとつは、算数と体育の授業を行うことだ。算数は4〜5年生を担当。授業自体は単独で行ったが、ノート活動や具体物の教材などを重視する自身のやり方は、算数を担当するほかの教員にも共有した。一方、体育は3〜6年生を担当。同国では2011年に体育が小学校の必修となったが、卒業時にパスしなければならぬ国家試験(PLE)の対象教科とはなっていない。そうした事情もあり、磯田さんの着任当時、3〜6年生では体育がいずれの教員にも割り振られていない状態だった。しかし、体育の重要性に共感した教員が自発的に体育を兼務。磯田さんと共に授業を行っていった。磯田さんの授業を見

学してもらったりすることが叶った。授業のほかに磯田さんが力を入れたのは、課外活動の支援。具体的には、「アルティメット」というスポーツのクラブを立ち上げ、体育担当となった教員と共にその運営を行った。

アルティメットとは、アメリカンフットボールのように「エンドゾーン」が設けられたコートで行う団体競技。7人ずつの2チームが「フライングディスク」をパスでつなぎ、エンドゾーンでキャッチする回数を競うものだ。競技人口は少ないものの、ウガンダにはそのナショナルチームもあり、他校ではすでに先輩隊員が普及に取り組みでもいた。

配属校を含め、ウガンダの小学校にはサッカーやバレーボールなどの「課外活動」は定着していた。しかし、それは従来、大会前に上手な児童で選抜チームを組み、特訓を行うだけのもの。好きな競技の練習に日常的に打ち込み、「努力」や「協力」などさまざまな学びをそこから得るといような役割は果たしていなかった。そんななか、新たなクラブ活動のあり方を紹介する意図で磯田さんが立ち上げたのがアルティメットクラブだった。選手全員の協力が必要であり、かつ男女混合の競技である点が、この種目を選んだ主な理由だ。

クラブの立ち上げは任期の半ば。2、3カ月もすると、部員が100人にものぼる人気のクラブとなっていた。

なく、勉強の「過程」に目を向けるよう促すようになった。たとえば、こんな質問をする。「お子さんのノートを見たことありますか?」。成績が悪い児童のなかには、ノートを取る習慣がない児童もいれば、反対にノートは一生懸命取っている児童もいた。前者であれば、ノートを取るよう働きかけることが必要であり、後者であれば、辛抱強く見守り、成績の向上を待つ必要がある。そうしたことを保護者に伝えようとしたのだ。すると、やがて保護者たちは、「成績」に関することだけでなく、「授業態度」や「ノートの取り方」など、勉強の「過程」に関することを尋ねるようになっていった。

教員たちの姿勢にも変化が

「保護者の考えは変わり得る」と感じた磯田さんは、アルティメットクラブを立ち上げた後、クラブ活動での様子も積極的に保護者に伝えるようになった。それをとりわけ意識したのは、勉強が苦手な児童の場合だ。保護者が成績の悪さをいつも嘆いていた子どものなかには、クラブ活動になると、「年下の子に教えるのが上手」「ほかのメンバーからの信頼が厚い」「人一倍努力する」など、「人間としての可能性」を感じさせる子もいたからだ。

成績の悪い我が子がクラブ活動ではがんばっていることを知った保護者たちは、クラブを運営する磯田さんや体育教員たちへの感謝の意を口にした。

三者面談で保護者にアプローチ

以上のような活動に取り組むなか、磯田さんはある思いを持つようになっていく。たとえば成績が悪くても、その児童の可能性を最大限に引き出すような風土をつくることだ。算数、英語、理科、社会の主要4教科で行われるPLEは、その成績次第でより良い中学校に進学できたり、反対に留年となったりするなど、子どもの人生を大きく左右する。さらに、学校ごとの成績の集計が新聞で公表されるため、入学希望者の数、ひいては入学金や授業料の合計額を左右するなど、学校にとってもPLEの出来・不出来は影響が大きいもの。そのため、教員たちは主要4教科の成績を上げることに関心を注ぐ。各学期には3日ずつ、保護者が学校に来て、自分の子どもと共に教員と話をすることができるよう日が設けられていたが、その日はいつも、教員と保護者に成績のことで叱られ、泣いている児童が多く見られるのだった。

磯田さんが最初にアプローチしたのは「保護者」たちだ。保護者訪問日に彼らに対応していると、「うちの子は出来が悪い」と嘆く人が多かった。なかには、「これで個別指導を」と現金を差し出す人もいた。当初は、角が立たないようにそうした要求を断るしか対処の方法がなかった。しかし、授業実践を重ね、個々の児童の様子が見えるようになってくると、保護者訪問日の面談で、「成績」という「結果」だけで

それまで「教員に我が子がほめられる」という経験がなかったからだ。なかには、かつて「個別指導を」と言って現金を渡そうとしてきた保護者が、「クラブ活動のお礼です」と言って現金を渡してくるようになるケースもあった。そうしたお金は、クラブの運営費に充てさせてもらった。

同僚教員たちは、ひとりひとりの児童を磯田さん以上に把握している。それを保護者に伝える重要性を感じていなかっただけのようで、やがて同僚教員たちにも、児童の勉強の「過程」を保護者に伝える姿が見られるようになっていったのだ。

教え子の両親の顔も覚える!

活動を通して、保護者と協力しながら教育にあたることの重要性を実感しました。私はなるべく教え子の両親の顔も覚えるよう努めたのですが、これはとても有効でした。街中で見かけたときに声をかけ、そこでお子さんの話をするのができたからです。

磯田さんからのメッセージ

岸野さん基礎情報

PROFILE

1989年生まれ、東京都出身。大学卒業後、都内の市役所に3年間勤務。2016年7月、協力隊員としてスリランカに赴任（現職参加）。18年3月に帰国し、復職。

活動概要

ウバ州政府農業局の地域事務所（バドゥワラ県バンダーラウェラ）に配属され、地域の農家を対象とした主に以下の活動に従事。

- 収入向上を目的としたイチゴ栽培の支援
- 収入向上を目的としたキノコ栽培の支援
- 可食野菜による家庭菜園を普及させるプログラムの支援



- 1 Aさん（奥中央）の農園で行った農業普及員を対象とするイチゴ栽培の研修。奥右が講師を務めたBさん
- 2 活動対象の農家が収穫したイチゴ。見栄えが悪いものも多かったが、ジャムの原材料としてコンスタントに買い取ってもらえるようになった
- 3 岸野さんは、当初活動対象とした農家グループ以外に、女性グループへのイチゴ栽培の紹介も行った

現地の篤農家が
イチゴの栽培技術を伝授

零細農家の収入向上を目的に、イチゴ栽培の普及に取り組んだ岸野さん。自身にも同僚にもその栽培方法の知識や経験がなかったなか、師匠となってくれたのは、現地で大規模なイチゴ農園を経営する篤志な人物だった。



CASE 3

同業者との協働

岸野和樹さん
（スリランカ・コミュニティ開発・2016年度1次隊）
の事例

岸野さんの配属先は、ウバ州政府農業局の地域事務所。その管轄地、バドゥワラ県バンダーラウェラの零細農家を対象に、収入向上につながるような新たな農産物の栽培を促すことが、メインの活動だった。そのひとつが「イチゴ」。農家グループを新たに立ち上げ、ビニール製植木鉢で育てる方法を伝えた。植木鉢での栽培を選択したのは、広い畑を持たない零細農家でも実践可能な方法だからだ。

岸野さんの配属先は、ウバ州政府農業局の地域事務所。その管轄地、バドゥワラ県バンダーラウェラの零細農家を対象に、収入向上につながるような新たな農産物の栽培を促すことが、メインの活動だった。そのひとつが「イチゴ」。農家グループを新たに立ち上げ、ビニール製植木鉢で育てる方法を伝えた。植木鉢での栽培を選択したのは、広い畑を持たない零細農家でも実践可能な方法だからだ。

と推測された。さらに、イチゴは苗を植えてから収穫までの期間が約6カ月と短いため、岸野さんの任期中に幾度も収穫に立ち会うことが可能。以上のような事情を勘案して選択したのがイチゴだった。

「イチゴをやります」と発信

岸野さんの日本での仕事は市役所の行政職。農業全般について知識や経験は持ち合わせてはいなかった。一方、農家への技術指導を担当している配属先の「農業普及員」のなかにも、イチゴ栽培の知識を持っている人はいなかった。そのため、岸野さんは普及に向けて一からイチゴ栽培の勉強をしなければならなかった。

インターネットでの情報収集を始めたが、いざ実践に移れば、対応しきれない問題がかならず出てくるはず。しかし、そうした問題も、隣県のイチゴ生産会社に指導を仰げばなんとかなるだろうと考え、岸野さんは栽培技術の勉強と並行して、活動対象とする農家グループの立ち上げも実施。配属先の農業普及員などの推薦をもとに、2つのグループが結成されたのは、着任から5カ月ほどの時期だ。

対象グループが立ち上がった時点で、イチゴ栽培に関する岸野さんの知識はまだ心もとない状態だった。そこで、隣県のイチゴ生産会社に教えを乞おうと飛び込みで訪問。しかし、「特許技術があるから」という理由で門前払

他農家への普及の動きも

イチゴ栽培の普及活動では、配属先の農業普及員の1人（Bさん/女性）がパートナー役を引き受けてくれた。岸野さんはBさんと共にAさんの農園に通い、スリランカで育つイチゴの種類や、それらの栽培方法を教わっていた。また、岸野さんが勉強がてら自宅に栽培していたイチゴの様子をAさんに見に来てもらい、水や肥料のやり方などについて具体的なアドバイスをもらうこともあった。そんな師弟関係を続けるうちに、やがて互いの関係はAさんの家で夕飯をご馳走になるようなものへと深まっていった。

Aさんから得た知識を土台に、岸野さんがBさんと共に農家への技術指導を開始したのは、農家グループを立ち上げてから2カ月ほど経ったころだ。年間を通して収穫できる品種を選び、その苗を各農家に50本ずつ配布。その段階でまずは、栽培方法を伝える一回目の講習を実施した。その後、巡回指導を重ねたうえで、収穫が近づいたころにふたたび講習を行い、育て方の軌道修正を促した。

収穫したイチゴは当初、グループでまとめて街中のスーパーに持ち込んだ。しかし、パッキングや納品の手間がかかるうえ、ある程度まとまった量でないと買い取ってもらえないという不自由さがあることから、その後、グループのメンバーは自力で他の販路を模索。ジャム製造会社を見つけ出すこと

いされてしまった。知恵袋の当てがほかになく、岸野さんは任地の人から「何をやりに来たのか?」「何ができるのか?」と問われるたびに、「イチゴ栽培を普及したい」と伝え、なんらかの有益な情報が返ってくるのを期待した。すると案の定、「良い人がいる。話を聞きに行ったらどうか」と、ひとりのイチゴ農家（以下、Aさん）を紹介してもらった。岸野さんの自宅からバスで1時間半ほどの所に住む、退役軍人の男性だった。Aさんは退職金を使って農園をスタート。さまざまな野菜と共に、6種類に及ぶイチゴを生産する、年商1000万円という規模の農園にまで拡大することに成功していた人物だった。

岸野さんは紹介を受けると早速、Aさんの農園を訪問。すると最初は、「日本が自分たちの金儲けのために来たのだろう」と警戒された。そこで岸野さんは、「ボランティアとして、スリランカ人の収入向上を支援するためにやって来た。そのひとつとして、イチゴ栽培の普及を行いたいと考えている」と説明。するとAさんは、「技術を教える相手は誰だ?」と質問。収入の低い農家で結成された2つのグループだと伝えると、ようやくAさんは「スリランカ人のためならば」と言って、協力を承諾してくれた。後にわかったことだが、彼は自分が持つ農業の知識をスリランカの人々に還元したいという思いの持ち主だった。

に成功し、そこが農家を1軒1軒回って買い取ってくれるようになった。そちらの買い取り価格はスーパーへの卸売より低かったが、形がいびつなものでもジャムの原材料としてなら問題ないことから、やがて販路はジャム製造会社に一本化。岸野さんの任期終了時には、平均すると1軒の農家が月に1000〜2000円の副収入を得ることができるようになった。

任期の終盤、活動対象とした農家以外にもイチゴ栽培を普及させるため、配属先に所属するBさん以外の農業普及員十数人を対象としたイチゴ栽培の研修も実施した。それでもAさんは全面的に協力。研修場所として自身の農園を使わせてくれたほか、Bさんと共に講師役も担ってくれたのだった。

人間関係づくりは果敢に!

私は活動パートナーの家にお邪魔する際、直前に「今からお邪魔します」と電話をかけて押しかけ、夕飯をご馳走になってしまうということもよくありました。そうやってプライベートで共に過ごす時間を積極的につくることは、関係を深めるうえでとても大切だったと実感しています。

岸野さんからのメッセージ

杉浦さん基礎情報

PROFILE

1983年生まれ、愛知県出身。病院と保健所に計8年間、栄養士として勤務した後、2016年6月に協力隊員としてグアテマラに赴任。18年6月に帰国。

活動概要

キチエ県教育事務所に配属され、主に以下の活動に従事。

- 小学生を対象とした身体測定、栄養知識テスト、食育授業、学校菜園の実施
- 小学校で配給される軽食の改善支援
- 妊婦を対象とした健康に関する講習会の実施(米国平和部隊ボランティアとの協働)

1 米国平和部隊のボランティア(奥の右から2人目)と共に妊婦対象の講習会を行う杉浦さん(奥の右端)

2 同じ講習会で、ニンジンなどの野菜を使って実際に離乳食のサンプルをつくり、年齢ごとにどの程度の硬さや大きさが適切かを伝える杉浦さん(手前右)

3 小学校教員を対象にした「軽食づくり」に関する講習会で、栄養バランスの良いメニューの例を紹介する杉浦さん(右)。現地の人々には「野菜嫌い」の傾向があったが、軽く揚げたり、酢を効かせたりして食べやすくしたものは好評だった



教育行政機関に配属され、栄養に関する課題の解決支援に取り組んだ杉浦さん。同じ任地の病院で活動していた他国からのボランティアの橋渡しにより、細かな調整が必要な保健行政機関の施設で活動を展開することが叶った。

他国からのボランティアと妊婦対象の講習会を実施



CASE 4

他国ボランティアとの協働

杉浦美帆さん
(グアテマラ・栄養士・2016年度1次隊)の事例

杉浦さんの配属先は、グアテマラ教育省の地方出先機関であるキチエ県教育事務所。求められていた活動は、同県ホヤバフ市を管轄する学区事務所を拠点に、同市内の小学校やコミュニティで栄養に関する課題の解決を支援することだった。

「自由によってください」と放任のスタンス。学区事務所には栄養士もいなかったため、杉浦さんは当初から独力で活動をつくり、実践していかねばならない状況だった。

要請書には、「ホヤバフ市では子どもたちの栄養が不足している」という情報が記載されていた。しかし、着任してみると、それを示すデータが見当たらない。そこでまず、杉浦さんは小学校における栄養の課題を見極めるため、自身の担当校だと配属先に指定さ

れた小学校13校で身体測定を実施。さらにその一部の学校では、児童を対象に栄養に関する知識を問うテストも行った。その結果、たしかに「やせ気味」の児童が多い一方、「肥満気味」の児童もいること、児童には栄養バランスに関する基本的な知識がほとんどないことなどがわかった。

この調査を踏まえ、杉浦さんが任期前半のメインの活動としたのは、担当の13校を巡回し、4〜6年生のクラスで食育の授業を行うことだ。単独での実施である。

グアテマラの公立小学校は午前中で授業が終わるため、「給食」はないが、中休みに「軽食」が出される。児童の栄養改善を目的とした制度だ。杉浦さんは任期の後半に入ると、「軽食」の改善に活動の軸足を移した。予算が倍増されたことを受けてのことだ。

各校に栄養士や調理師は置かれておらず、「軽食」は教員がメニューを考え、教員や保護者が調理をする。そのため、杉浦さんが着任した当時、栄養バランスの面で課題があった。ホヤバフ市の小学校で一般的だったメニューは、トウモロコシなどの穀物を原材料とする粉末を牛乳に溶かしただけのものが主流だったのだ。そうしたなかで杉浦さんが取り組んだのは、ビタミンやタンパク質が摂れるようなバラエティーに富んだメニューの導入を支援すること。具体的には、担当校の教員や調理担当の保護者を対象に、新規メニューの提案やその調理法の指導、さらには

あったことから、協働で講習会を開催することとなったのだ。

1回の講習会は2〜3時間。講師役は得意分野に応じて2人で分担。Aさんが「家族計画」や「出産時のリスク」などに関する講習を担当し、杉浦さんは「妊婦が摂るべき栄養」や「離乳食」などに関する講習を担当した。Aさんが講習を担当したテーマは、彼女が病院や保健所で普段から講習を行っているものだった。

保健所との間の橋渡し

Aさんと協働することにはさまざまなメリットがあった。そのひとつは、受講者にとって「費用対効果」が高い講習会となった点だ。保健所支所に何度も足を運ぶことは妊婦にとって負担だが、杉浦さんとAさんが協働したことにより、1回の講習会でより多くの情報が得られるようになった。

もうひとつのメリットは、講習会の「マネジメント」に関するものである。教育行政機関に配属されている杉浦さんにとって、保健所支所やそれを管轄する保健所は「未知の世界」。保健所支所で活動することについて、杉浦さんが単独で保健所に打診したこともあったが、返事は良いものの、実行に移してもらえなかった。一方、病院に配属されているAさんは、保健所とのつながりが強かった。そのため、この活動では、講習会の開催日や受講者集めなどに関する保健所支所との間の調整を、Aさ

「メニューづくり」「食材調達」「衛生管理」など軽食づくりに必要な一般的な知識の伝授なども行った。この活動も、基本的に単独での実施だった。

新たな活動場所を獲得

以上のように「小学校」を舞台とした活動が柱のひとつだった杉浦さんだが、当初から小学校以外の場で活動するチャンスも模索。手探りでコミュニティや医療施設に足を伸ばすなどして、情報収集に努めた。そうして、次第に活動パートナーとなる人や団体とのつながりが配属先外に生まれていったが、なかでも重要なパートナーとなったのは、同市で活動する米国平和部隊のボランティア(以下、Aさん)だ。彼女とタッグを組んだことで、任期の終盤、活動に新機軸が加わった。市内の農村部10カ所にある保健所支所を回り、地域の妊婦を対象に保健に関する講習会を実施する活動である。

Aさんの配属先は、ホヤバフ市保健所に隣接する病院。医療の専門性は持っていないが、着任前の研修で学んだノウハウを使って母子保健分野の啓発活動を行っていた。杉浦さんは保健所を訪問した際にAさんと出会うと、同じ外国人ボランティアということですぐに意気投合した。

杉浦さんが「地域の女性に向けて栄養に関する講習をしてみたい」とAさんに相談したのは、出会いからしばらく経ったころ。Aさんにも同じ希望が

さんが一手に担ってくれた。言わば、Aさんに相乗りする形で、杉浦さんの新たな活動が生まれたのだ。

協働の活動だったことは、保健所側の協力姿勢にも影響があった。「外国人ボランティア2人がそろって行くなら」と、行き帰りに使う車を用意してくれたほか、保健所支所の看護師たちも、妊婦への参加の呼びかけや、講習での現地語への通訳などを請け負ってくれたのだ。

講習会の後、開催した保健所支所の看護師から「今後、同様の講習会を自分たちで続けていきたいので、使った教材を残してほしい」と要望されることもあり、杉浦さんとAさんの活動は一過性で終わらないものとなった。

「協働の可能性」を常に意識!

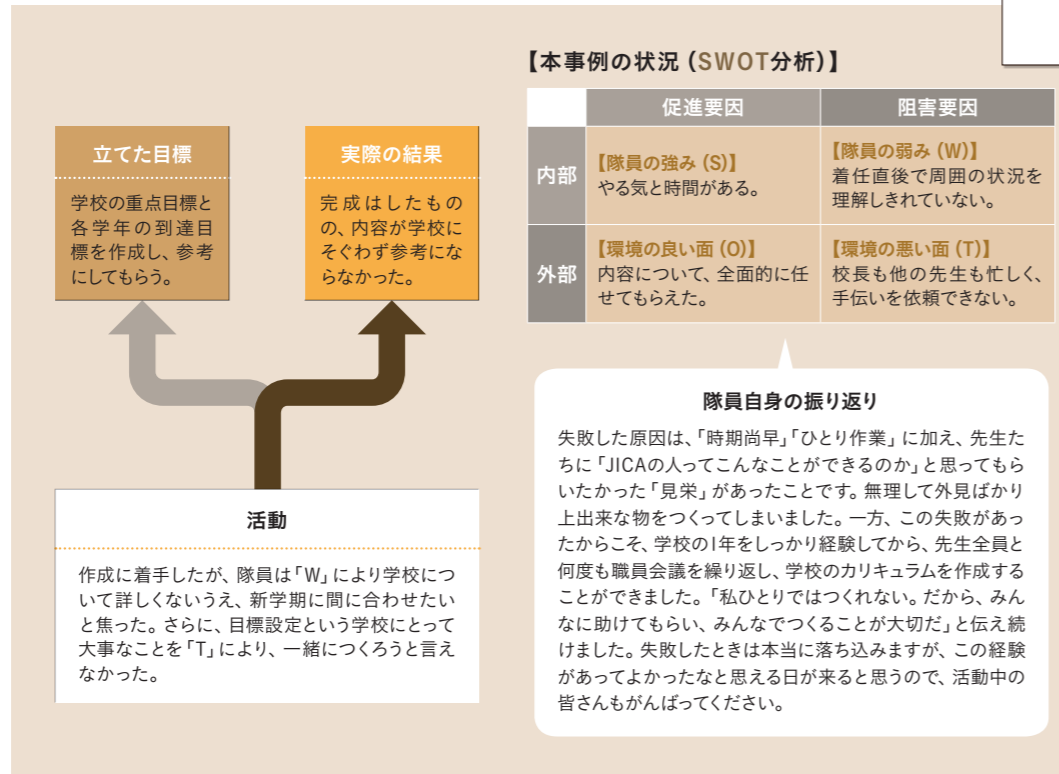
新たな出会いがあったら、まずは「この人と一緒に何かできないか?」と考える。この習慣は大切だと思います。というのも、私はAさんと出会ってから協働を発想するまでにタイムラグがあったため、「もっと早くから協働していたら、もっと活動が広がったのに」という思いが残ったからです。

杉浦さんからのメッセージ

“失敗”から 学ぶ #167



事例整理



他ボランティアの分析

現場で望まれていることをじっくりと観察

私の場合も、着任後すぐは気負いもあり、教員のレベルアップとして大学の講義のようなことをしていました。誰も批判しないので、疑問も持たずにいましたが、実際に望まれていたのは、多くの人たちに日本語学習の楽しさを知ってもらうことでした。その後は、オリジナルの着ぐるみを製作し、自らも着て、講演会などに軸足を移していきました。要請を出す幹部と、実際に仕事を共にする同僚たちの考え方が異なることもあります。最初は時間をかけて、現場で何が望まれているかじっくりと観察することも必要と思われまます。

文＝協力隊経験者

- SV・日本語教育・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

日系人協会に所属し、日本語の普及とレベル向上を目指し、日本語教育や教科書や教材の研究などを行った。

まずは配属先を知ることが重要

私も配属当初、現地の事情を十分に理解しないまま新しいことを始めようとして失敗したことがあります。日本人教師は母語話者であっても、配属先での仕事に関しては「新人」です。そのことを理解して、CPや同僚教師に、配属先の事や日本語教育事情などを教えてもらい積極的にコミュニケーションを取ることで活動がスムーズになりました。現地ことは現地の先生がよくわかっています。ひとりで何かしようとするのではなく、活動にかかわる多くの人に意見をもらい、一緒に考えていくことでよい活動ができると思います。

文＝協力隊経験者

- アジア・日本語教育・2014年度派遣
- 取り組んだ活動

公立高校で第一外国語として日本語を学ぶ生徒に指導を行った。普段の授業だけでなく、日本や日本文化への理解が進むようにと、スピーチ大会などのイベントの企画や運営にも取り組んだ。

着任直後に学校の重点目標の作成を依頼され、つくったものの……

文＝門之園佳子さん(日系JV／ボリビア・日系日本語学校教師・2016年度派遣)

主な活動先であるサンタクルス日本語普及学校の授業見学を始めて1カ月が経ったとき、当時のカウンターパートだった校長から各学年の到達目標と学校の重点目標を変えてほしいと言われました。重点目標が25年間変わっておらず、毎週土曜日だけの授業で夏期講習もやめてしまった今の子どもたちの日本語力には、合っていないからという理由でした。できれば3カ月後の新学期から配布したいという校長の希望に、「私にできることなら」と勢い勇んで引き受け、学年ごとに文章で短く書いてあっただけの到達目標を表にして、「聞く・話す・読む・書く」の4技能別の目標に加え、学習語彙や文法、使用教材なども見やすく改善しました。学校全体の目標を今までつくったことがなかったため、小学校教育の同期に頼んで他校の要覧などを見せてもらい、他の先生たちに担当クラスの学力などを聞き、日本の教育指導要領なども参考にしました。やっとできあがったとき、自分では「けっこういいのができたんじゃないの？」と大満足でした。校長に見せたら本当に喜んでくれて、「素晴らしい」とおっしゃってくれました。そしてウキウ

キしながらコピーをして、先生たちに「来年からこれを参考にしてくださいね」と配り、先生たちがいつでも見られる場所に置かれることになりました。ところが、新学期が始まり職員室を見まわしてみても、重点目標を見ている先生はひとりもいません。そしてなんと、校長も私自身も全く見なかったのです。先生たちに「重点目標は参考にされていますか？」と質問して回りましたが「あ……うちの学年はまだここまで進んでいないので見ていないんです。すみません」と言われました。私の方がすみませんという気持ちです。自分でも見ないのだから他の先生が見ない理由は明らかです。立派な目標を掲げましたが、それは他を真似ただけで、この学校の、この子たちのためにつくられた目標ではなかったからです。実際の授業や日系社会の行事の練習・準備、他クラスの授業見学と、学校で過ごせば過さずほどに、最初につくった重点目標は飾り物のようだと感じようになりました。結局、つくり直すことになりましたが、今でも最初につくった重点目標は持っています。この失敗も大切な経験だと思うからです。



門之園さん(後列右端)が担当していた最上級生の卒業式の写真



PROFILE

1981年生まれ、大阪府出身。京都外国語大学の日本語学科を卒業後、タイのバンコクにある日本語学校に勤める。そこでタイマッサージの資格を取得。帰国後、日本やオーストラリアでセラピストなどとして勤務後、2016年4月、日系社会青年ボランティアに参加。2018年7月に帰国。

活動概要

- ボリビアの日系社会子弟の日本語力向上と日本語学校の活性化のため、以下の活動を行う。
- 毎週土曜日の日本語授業
 - カリキュラムづくり
 - 校内研修や日本語教師合同研修会への参加、企画
 - 日系社会の行事への参加など

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#H111

鍼灸 マッサージ師

派遣中 ▶ 2人

累計 ▶ 48人

分類 ▶ 保健・医療

活動例 ▶ 視覚障害者の職業訓練校での
技術指導など

類似職種 ▶ —

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2018年9月30日現在。



職業訓練校の生徒に指圧の技術を伝える楽間さん(右)。活動先について「先輩隊員の功績があり、校長やCP、同僚が活動に協力的でとても恵まれた環境だった」と楽間さんは振り返る

#G238

料理

派遣中 ▶ 9人

累計 ▶ 115人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 職業訓練校での料理指導、日本
料理の紹介など

類似職種 ▶ 家政・生活改善、栄養士など

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2018年9月30日現在。



職業訓練校で調理実習を行う露口さん(右端の手前)。露口さんは現在、隊員時代にお世話になった日本食レストランに就職し、海外での日本食提供について勉強している

PROFILE

1989年生まれ、神奈川県出身。2011年湘南医療福祉専門学校東洋療法本科を卒業。同年、鍼灸・あん摩マッサージ指圧師の免許を取得し、整骨院と妊活専門の鍼灸院に勤務。15年3月、協力隊に参加。17年3月に帰国し、現在は都内の産婦人科内の一室で、妊娠中、産後、婦人科疾患に悩む方に対し、鍼灸やマッサージの治療を行っている。

活動概要

- ホンジュラスの視覚障害者職業訓練校で生徒の自立と社会参加を目的とし、以下の活動を行う。
- 今までのカリキュラム(あん摩、オイルマッサージ)や手技の見直し
 - 指圧の技術・知識の伝達
 - 資料作成



話

らくまゆりか
楽間優里香さん

(ホンジュラス・2014年度4次隊)

PROFILE

1990年生まれ、三重県出身。2012年、奈良佐保短期大学生活未来科食物栄養コースを卒業後、宝山寺福祉事業団あすかの保育園に栄養士として入社。3年間、給食調理や献立作成、食育活動などに従事した。退社後、15年9月、協力隊に参加。17年9月に帰国し、現在はカサブランカにある日本食レストランILOLIに就職。

活動概要

- モロッコのテトゥアンにある職業訓練校にて、15~30歳の学業を中退し、経済的に生活が困難な青年を対象に、下記の活動を行う。
- 料理・製菓の技術を指導
 - レストラン、パティスリー、ホテルなどに出向き、実習先や就職口の開拓
 - 身近な食材で再現できる日本食レシピの作成など



話

つぐくまきよ
露口聖代さん

(モロッコ・2015年度2次隊)

Q 活動の最大の困難は？

生徒の年齢は16~60歳と幅広い上に、弱視から全盲、目が不自由になったタイミングもさまざまでした。日本でも目の不自由な方と接する機会がほとんどなかったため、まずはどう接すれば良いのか考えました。また、赴任当初はスペイン語力が不足しているうえ「見て真似して」ということができなかつたので、手技だけでなく自分のマッサージする姿勢や、患者にどんな姿勢をとってもらえばいいかなどを伝えら

Q メインの活動は？

職業訓練校の生徒たちに指圧・あん摩技術を伝えるという活動が主でした。派遣国ではオイルマッサージが主流です。それなのになぜ指圧・あん摩の指導が必要かというと、現地では断水や停電が多いからです。大量のタオルを使い、洗濯が必要なオイルマッサージよりも、服の上から施術できる指圧・あん摩といった「手技」の方が場所を選ばず行え、衛生面でも安心です。オイル代というコストもかかりません。私は3代目隊員で、すでにあん摩の授業が行われており、あん摩の授業(主にマッサージの手順)の見直しをしながら指圧の授業を準備。授業は約8人の少人数で行っており、まずは座学、そして手技や手順の説明、最後は時間内に全身をマッサージする、という過程で進めていきました。

Q この職種のやりがいを教えてください。

私は自分の持っている知識や技術を伝えることで治療家が誕生し、その治療家たちが現地の人を治療(マッサージ)することで現地の人も笑顔が生まれるといいな、と思い協力隊に参加しました。現状、卒業できても全員が働き口を見つけれられるわけではありません。それでも、「家族にマッサージをしてあげている」「治療院をオープンした」「スバに就職が決まった」など、少しずつで良いので社会へ参加していく生徒が増えていくと嬉しいですね。

Q 試みた解決策は？

接し方は、赴任先の先生・生徒がどうもウエルカムで迎えてくれたので自然と解消しました。手技は、最初に私が生徒たちにマッサージをして指圧を知ってもらうことから開始。その後は、生徒が私にマッサージ→手順やマッサージをしている場所・姿勢が正しいかチェック→間違っている場合はすぐに私が生徒をマッサージ→その後再度生徒が私にマッサージ、という練習を繰り返しました。CPや同僚が素晴らしいマッサージ師で、先にしっかりと技術を理解してくれ、私の伝えられないこと(語学の問題)を生徒に伝えてくれたのも大きかったと思います。

Q 活動の最大の困難は？

一番頭を悩ませたのは、カウンターパート(以下、CP)とのかかわりでした。初代ということもあり、配属先も隊員への対応に慣れていなかったと思います。CPと毎日顔を合わせ、一緒に居る時間が長くなるほど、仕事への意識が噛み合わなくなりました。活動中盤からは少し距離を置き、個人で協力者を集める方向にシフトチェンジすることにしました。幸いにも、配属先のデイレクターはいつも協力してくれたのでとても心強かったです。

Q メインの活動は？

職業訓練校に通う生徒の実習先を開拓するため、町中の飲食店に訪問していました。オーナーや料理人と知り合う中で、日本食のニーズを感じる機会が多く、それが生徒の就職につながるのではと思うようになりました。当初は資金不足のために学校で日本食の授業は断念していました。活動中盤、よく訪問していたスーパーマーケットで、お寿司のデモンストラーションの依頼を受け、イベントを行いました。そこからつながりができ、調理実習の食材を支援してくれることになり、日本食の授業を実施することができました。料理手順を写真に納め、アラビア語とフランス語のレシピを作成しました。

Q 試みた解決策は？

とにかく日本人であり隊員である自分にしかできないことは何かを考えました。その中で一番力を入れたのは、CPが実施していなかった生徒たちの実習のフォローアップです。各実習先を定期的に巡回し、生徒と一緒に厨房に入って問題点があるかどうか調査しました。そして、オーナーに直談判して実習環境の改善や、新たな実習口を増やすことを行いました。靴の底が取れるまで町中を歩き回った成果が、実習先や就職口の開拓につながったのだと思います。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

実は、私も配属先の学校の生徒たちのように、10代でドロップアウトした経験があります。当時の私からすれば、モロッコで同じような境遇の人のために、青年海外協力隊員として活動しているとは夢にも思わないうし！！どんな経験も、無駄にはならないと思います。

それに加え、みんなで食事をすることを大切にしているモロッコの人たちの温かさに触れたのは、とても貴重な経験でした。技術や知識を伝えることも大切ですが、まずは現地の人と一緒にテーブルを囲み、食事を楽しんでほしいと思います。



before ▶ after 人生を変えた2年間

before
介護老人保健施設支援相談員

after
介護職業訓練校の現地法人職員



職業訓練校を設立するため、ミャンマーの保健省との打ち合わせをする合弁会社のスタッフと片岡さん(左列、手前から4人目)

合弁会社ポールスター・カイゴ・サービス*

設立: 2015年7月
所在地: No.(82-A), Room-502, 5th Floor, Treasure Residence, Sayar San Lane, Bahan Township, Yangon, Myanmar.
事業内容: 人材サービス事業、介護サービス事業、教育事業
従業員数: 9人(2018年12月現在)
URL: http://www.polestar-kaigoservice.com/

2017
6月、就職②
ミャンマーにある日本の介護会社とミャンマーの旅行会社の合弁会社ポールスター・カイゴ・サービスの現地スタッフとして勤務。教育事業を担当し、職業訓練校の開所に携わっている。

2015
3月、帰国。

2009 1987
3月、久留米大学文学部社会福祉学科卒業後、介護老人保健施設の支援相談員として勤務。
3月、青年海外協力隊に参加①
タイのコンケン高齢者福祉開発センターにてソーシャルワーカーとして活動。来所高齢者への体操や脳トレニングなどのアクティビティや病気の勉強会の実施、高齢者学校での講師、同僚の家庭訪問や病院訪問の同行、ソーシャルワーカーへの助言、住宅改修のアドバイスなどを行った。

福岡県出身。

選択の理由

任国外旅行でミャンマーを訪れ、長年閉鎖状態が続いていたとは思えないパワーを感じた。若い人が多く、多様なメーカーの車が走り、多くの人がスマホを持っている。「アジア最後のフロンティア」と言われるこの国に住みたい気持ちもあり、就職を決意。

選択の理由

介護老人保健施設で、業務改善に取り組み、大きな改善が見られたことで仕事が一段落。いつか参加したいと思っていた協力隊への参加を決めた。

ミャンマーで働く

協力隊に参加

*介護関連会社(さくらコミュニティサービス・笑顔いちばん)及びミャンマー現地法人(ミャンマー・ポールスター・トラベル & ツアーズ)による合弁会社。

介護老人保健施設で支援相談員として、6年間働いた後、協力隊に参加した片岡さん。タイでソーシャルワーカーとして活動中に、日本企業がミャンマー初の介護職業訓練校を設立する話を聞き、就職を決意。現在は、同校を開校するため、ミャンマーで働いている。

入口から出口まで人を支える

福祉関係の仕事に携わっていた父と祖母の影響で貧困問題に興味を持ったという片岡さん。「困っている状態から良い状態になるまで、その人にかかわりたい」と思い、福祉関係の支援相談員になろうと決めたのは中学生のときだ。高校生になり協力隊も進路のひとつと考えた際、要請書を見て社会福祉士の職種は実務経験が必須なことを知る。そこで、大学に進学し、ソーシャルワーカーの資格を取得。卒業後は介護老人保健施設の支援相談員となつて、実務経験を積んでいった。

ソーシャルワーカーは、支援を必要とする人やその家族の相談に乗り、利用できる社会福祉サービスを伝え、多様な職種の人たちをつなぎ、困りごとの解決に当たる。高齢化が進んだ今の日本には欠かせない仕事だ。片岡

支え合う地域をつくるために

タイ・ソーシャルワーカー・2014年度4次隊
かたおかのぞみ
片岡希望さん



他職種の隊員と協働し、来所高齢者へのアクティビティを実施する片岡さん(右)

つて暮らしていた。

「日本が失いつつあるコミュニティの力や人とのつながり。タイで知った地域全体で地域を見守るシステムを、日本でつくることのできないかと思いはじめました」

帰国したら、その学びを生かし、困っている人と地域をつなぐ「*コミュニティソーシャルワーカー」として働こうと思った。一方で、専門分野であるソーシャルワークを伝えようと意気込んで海外に出たにもかかわらず、思い通りにいかず、未熟な自分を感じ、やり残した気持ちも胸に残っていた。

つながりが生む、新しい目的

派遣中、ミャンマーで介護事業を展開する日本の企業の話聞く機会があり、そこで現

さんは、施設に6年間勤務し、協力隊への参加を考えたが、日本で必要な仕事なのに本来に海外に行く必要があるのか、悩んだという。「今、日本にはソーシャルワーカーが約3万人いますが、その中から海外に出る人は非常に少ない。だからこそ海外で日本のソーシャルワークを伝える意義があると思いました」

高齢者福祉の要請を探し、応募。ソーシャルワーカーとしてタイの高齢者施設への派遣が決まった。活動先は、高齢者の通所施設で、比較的元気で裕福な高齢者が通所する場所。求められた活動は、通所者に対する介護予防のアクティビティなどが多く、自身が取り組みたかったソーシャルワークに関連する活動が少ないことに歯がゆさを感じていた。しかし、配属先のニーズに沿うため、通所する高齢者のためにできることを日々考え、活動。少ないながら、現地のソーシャルワーカーに同行し、国営の介護施設への入所を判断するため、病院訪問や家庭訪問もした。

訪問をして知ったのが、日本とタイとの介護の違いだ。タイも日本と同じように核家族化は進んでいるが、介護保険制度はない。しかし、近所に困っている人がいれば、一緒にご飯を食べたり、泊まりに行ったりして助け合

勤務先の社長と知り合った。高齢化が進む東南アジアで人材育成の重要性を感じていたことも興味をもったという。

やり残したことをミャンマーでやりきろうと、帰国後、現勤務先の社長に「私はソーシャルワーカーなので、介護全般の仕事がわかる。タイで活動した経験もあり、きつと役立つ」と売り込んだ。その結果、日本とミャンマーの企業の合弁会社が介護職業訓練校を設立する事業を行っており、その現地スタッフとして雇用された。同校は、将来的にミャンマーでも必要とされる高齢者介護支援を学ぶ学校で、卒業後は、日本の介護施設への就職も斡旋。その後、ミャンマーで日本の介護経験を還元してもらおうことを目的としている。

現在は、設立準備のため、役所への申請書類や訓練に必要なカリキュラムの作成に取り組んでいる。日本とは違う状況を、現地の人にもどう伝えるかなど、思い悩むことも多い。「ミャンマーの平均寿命は、約67歳。認知症や寝たきりの高齢者が一般的ではなく、医師も実際に担当したことがないと言います。また、排泄介助もオムツが高価で一般的ではない。周知されていないことをどう伝えていくのが課題です。タイでの経験で、他国の介護事情への知識があるのは助けになっています」

学校設立に一からかかわるといって得難い経験は、今後の糧になると感じている。「帰国したらコミュニティソーシャルワーカーとして、高齢者だけでなく、困った人の生活が少しでも良くなることを提案し、何でもやってみよう。移動コンビニもいいですね」という片岡さん。ミャンマーのために自身の経験を生かすことが、次の一歩につながっていく。

*コミュニティソーシャルワーカー…地域において、支援を必要とする人の生活を見守り、万が一のときの早期発見につながるよう地域の人間同士のつながりをつくる援助を行う人のこと。また、地域の生活支援のための新たなサービスの開発や、公的制度との調整なども行う。



理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第②回 スポーツ分野篇

Cさん(女性)

●現職：スポーツクラブの運営会社に水泳などの指導者として勤務
●派遣前のキャリア：協力隊は現職参加。競技歴はバスケットボールを約20年間。
●JICA 海外協力隊：▶体育・アフリカ・2015年度派遣 ▶州教育局に所属され、バスケットボールの普及などに従事。

Bさん(男性)

●現職：スクールとチームを擁するサッカークラブの指導者
●派遣前のキャリア：サッカークラブで指導。選手としては社会人でもプレー。
●JICA 海外協力隊：▶サッカー・アジア・2015年度派遣 ▶サッカー連盟に所属され、少年層へのサッカー指導に従事。

Aさん(男性)

●現職：アマチュア野球の統括団体に勤務
●派遣前のキャリア：野球歴は高校までの約10年間。学卒直行で協力隊に参加。
●JICA 海外協力隊：▶野球・アジア・2014年度派遣 ▶野球協会に所属され、野球の普及活動に従事。

ところ、「うちの仕事はスポンサー獲得などのデスクワークが基本なので、「サッカーばかりやってきました」というような人が来て、おそらくできないと思う」と言われてしまいました。

A 私の勤務先の主な事業は、国内での各種大会の運営、あるいは指導者や審判員の育成講座の開催などです。私はたしかに仕事は地味な事務作業ばかりです。私はデスクワークに関してはあまり経験がなかったのですが、「英語が使える」ということで就職させていただいています。ですから、英語を使うような仕事は私に回ってくる可能性が高く、たとえば、途上国に野球道具の支援をする事業などは私の担当になっています。そのほか、まだ組織としては何もアクションを起こすことができていないのですが、今後は海外での野球の普及も事業に含まれてくる予定なので、それに備えて語学の学習も怠っていません。

協力隊経験の影響

C Aさんのお話をうかがっていると、海外とかかわる仕事で協力隊経験が生かされているのを、とてもうらやましく感じます。私の仕事は、海外とのかかわりがまったくないです。ただ、社長が理解のある方で、「協力隊の経験を、クラブに通う子どもたちに伝えてくれ」と言われ続けており、水泳教室の子どもたちにも協力隊の経験を話す機会を設けてもらっている点も言えます。職場で「働き方」の見直しを呼びかけていることですね。たとえば、派遣国の人と比べると、同僚たちはとても勤勉に働きますが、本当にそれが効率的なのかと感じることもあります。復職した当初は、「休憩するの

帰国後の苦労&失敗

A 私は現在、アマチュア野球の統括団体に勤務しているのですが、帰国後はまず、メーカーに就職しました。学卒直行での参加だったので、まずは一般企業を経験しておいたほうがいいだろうと考えたからです。けれども、そこで挫折を味わいました。「いずれは英語力を生かして海外営業を」と思い、営業職で入社したのですが、主な担当業務は納入した機械のメンテナンス。機械ばかりを相手にしている日々に、「どうしても興味を持っていない」と感じてしまったのです。そうして退職した後、先輩の野球隊員から誘われて、今の勤務先に就職しました。

B 私は日本のサッカークラブで指導者として働いており、協力隊時代の職種と関連のある仕事なのですが、帰国後に最初に就職したのは、Aさんと同様、一般企業でした。不動産会社の営業職です。帰国直後、海外でサッカー指導をする仕事の誘いをいくつもいただいたのですが、いずれ結婚したときに家族を養っていけるような給料でありませんでした。一方、国内でのサッカー指導で家族を養えるような給料を得るためには、レベルの高い指導者ライセンスを取らなければならないのですが、そのためには多くの時間とお金がかかるシステムになっており、容易ではない。そうして悩んだ末、サッカーから離れることにしました。ところが、やはり営業職は自分に向いていなかった。そうして、もう一度下積みをやり直し、先々レベルの高い指導者ライセンスを取ろうと思いい、サッカー指導者の仕事に戻りました。現在の勤務先は、派遣中から協力隊仲間を通じて縁があった所です。

は悪いこと」のように感じ、しんどかったりもしました。そこで今では、ときどき派遣国の人たちを思い浮かべながら、「少しは休憩を入れたいほうがいいのでは」と同僚たちに提案しています。

B 私も、サッカー指導自体は海外にかかわるものではありませんが、私自身の指導の仕方は、協力隊経験によって変化したと感じています。日本のスポーツ指導者は全般的にそうではないかと思いますが、私は派遣前、どうしても「怒ってわからせよう」とする傾向がありました。「できない子」や「話を聞かない子」に対し、怒ってわからせようとする。現在の同僚たちを見ていても同じです。でも、子どもは怒られたからといって伸びるわけではないですよ。私は協力隊の経験によって、「怒らない指導」ができるようになりました。怒るのでなく、教え子たちとしっかり「対話」をしてわからせる。協力隊時代、時間や約束を守らない子に怒っても、時間や約束に関する習慣が日本とは違う国ですから、何を怒られているのかわからず、協力隊時代、時間や約束を守らない子に怒っても、時間や約束に関する習慣が日本とは違う国ですから、何を怒られているのかわからず、協力隊時代、時間や約束を守らない言葉で伝えるしかない。すると、子どもたちはちゃんと考え、理解するようになる。そういう経験を通じて、教え子たちと粘り強く「対話」する力が私に付いたのだと思います。

A 協力隊は、日本におけるスポーツのあり方について、あらためて考えさせられる機会でもあるということですね。私は、野球は社会性を学べる集団競技としてとても良いスポーツだと思っっているのですが、一方で、Bさんのお話のように、「指導者が怒って頭ごなしに言うことを聞かせる」という日本のスポーツのあり方に、ずっと疑問を感じていました。グラウンドに立ってプレーするのは選手であり、結局は選手自身が考え、瞬間瞬間の判断を下して

C 私の勤務先はスポーツクラブを運営する会社で、主に水泳の指導を担当しています。私は現職参加ですので、おふたりのように進路開拓の苦労はありませんでしたが、同じ会社に戻って働くことの難しさは感じました。派遣前は5年間、一番下で働いていたのですが、復職すると中堅になっていた。しかも「海外経験者」ですので、復職した当初は「後輩より仕事ができないといけない」というプレッシャーがとてつかなかったのです。

「指導」か「運営」か

A Aさんは「野球指導者」という道は考えなかつたのですか。

B 全然考えなかつたですね。野球もやはり、学校の部活を除くと、指導者でご飯を食べていくというのはなかなか難しい。そもそも、野球に関しては「指導」より「運営」のほうが興味を持っています。少子化が進み、ほかにいろいろあるスポーツや娯楽があるなか、日本の野球を今、どういう立ち位置に持っていかなければならないか。あるいは、サッカーと違ってまだアジアや北米・中南米など限られた地域でしか国際大会ができないなか、野球をもっと多くの国に広めるためにはどうすればいいのか。そうしたことを考え、実行することのほうが興味があります。

B 実は私も、日本サッカー協会やJリーグなど、サッカーの「運営側」の組織に入りたいと考えたことがありました。そういう組織には「国際部」があり、海外のサッカー協会やサッカーリーグとかかわる事業もしているの、おもしろそうだな。ところが、派遣中にスカイプでそういう組織に採用の話がうかがった

いく力を持たなければならぬ。それは「怒る指導」では身に付かないですね。

C 日本のスポーツには「やらされている感じ」があるということは、私も派遣国のスポーツを見て思いました。決められた練習を、決められたとおりにやる。派遣国の方々は、しっかりとした道具もないのに、ラフに、気軽にスポーツを楽しんでいましたから。そういうスポーツのあり方は、日本でも一般的になればと思います。

今後のビジョン

A 「気軽に楽しむ」という点では、野球という道具を揃え、1チーム9人いないとゲームができませんから。そうしたなか、野球をもっと取り組むやすいスポーツにするため、少ない人数で行う「ストリート野球」ともいべきものを世界中に普及させることが計画されています。海外ではすでに行われているものであり、野球の衰退を押しとどめる可能性があるかもしれない事業ですので、当面はこの仕事に力を入れていきたいと考えています。

C 水泳は反対に敷居が低いスポーツだと思っています。ひとりでもできるし、泳げるところさえあれば道具もいらない。そうしたことから、私の勤務先の社長も水泳教室の海外展開なども考えているので、いずれその仕事に携わることができればと思っています。

B サッカーはすでに途上国を含めた多くの国で行われているスポーツですが、私はいずれ、途上国の代表チームの監督をやってみたいという希望があります。ですから、今はじっくり指導者としての力を蓄えていきたいです。

知ったク情報



写真を楽しむ②

ナビゲーター = 森 佑一さん
(ヨルダン・環境教育・2014年度3次隊、フォトジャーナリスト)

活動中(仕事)の写真撮影で 覚えておきたい3つのポイント

JICA海外協力隊として現地で活動する中で、記録や報告会などのための写真を撮る機会も増えるかと思えます。自分自身、活動中にさまざまな写真を撮って人に見せるも、伝えたいことがうまく伝わらないことが多々ありました……(汗) 自分がやっている活動を人に分かりやすく伝えるために、どのような写真を撮ると良いか。自身の経験を踏まえてお伝えできればと思います。

① 写真を見る人の立場を意識しよう

撮った写真を見せる相手は、自身の活動についてよく知らない人であることがほとんどです。自分が良いと思った写真を見せても反応がまいちだったという経験は誰しもあるのではないのでしょうか。そのため、写真を撮るときには「初めて見る人にも状況がうまく伝わるかな?」と考えながら撮影をすることが大切です。

② 全体的な/具体的な活動の様子を撮ろう

撮影時は、「活動全体の様子が分かる写真」と「具体的にどういったことをしているのかが分かる写真」を撮ることが大切です。まず、活動の現場全体を撮影することで状況の概要を伝えることができます。次に個人や集団など活動をやっている主体に近づいて撮影することで具体性が増します。どこで (where)、誰が (who)、何を (what)、どうしているか (how) を意識しながら撮影しましょう。そうすることで、どこを背景にして、何をしている人を、どんな角度で撮影するのが良いのか自然と見えてくるのではないのでしょうか。

③ 可能な限りさまざまなシーンをたくさん撮ろう

活動中にはさまざまなシーンが存在します。ゴミ拾いイベントを例にあげると、ゴミがポイ捨てされた道路、ゴミを真剣に拾っている参加者の表情、汚れた軍手、いっぱいになったゴミ袋、きれいになった通り、集合写真などです。②に加えて、他にもたくさんの物やシーンを撮影しておくことで、後で人に見せる時に使える写真の選択肢や表現の幅が広がります。活動中は撮り直しも難しいので、可能な限りどんどん撮りましょう。

活動現場を撮影するときには、上記のことを頭の片隅におきつつ、自由に撮影してみてくださいね。任地での写真ライブに役立てば幸いです。

生活に役立つ技



あるもので日本の味①

ナビゲーター = 小栗美香子さん
(ザンビア・コミュニティ開発・2017年度1次隊)

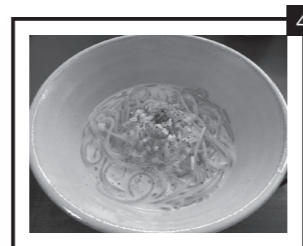
トンコツ風汁そばの作り方

停電が続いて肉が買えない、断水のため洗いの水を節約したい方向けのレシピです。鍋ひとつ、家にある食材で『トンコツ風』の汁そばを味わえます。とはいえ、豚肉が手に入るのであれば、ぜひ豚肉を煮込み、チキンスープの素の代わりに塩で味をつけると本格的になると思います。また、牛乳を使用した方がよいですが、コーヒー用クリームパウダーで代用するときは、できるだけ甘くないものを使用するとよいでしょう。

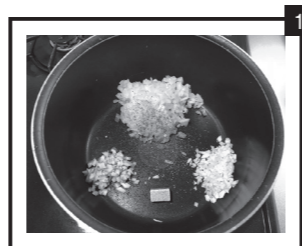


③ 火を止めて、牛乳(今回はクリームパウダー。使用の際は最初の水を50ml多く入れる)を入れる。味をみて、塩・コショウで調節する。

- 【材料】(1人前)
- 水…400ml
 - 玉ネギ(みじん切り)…50g
 - チキンスープの素…1/2個
 - ニンニク(みじん切り)…小さじ2
 - ショウガ(みじん切り)…小さじ1
 - コショウ・塩…少々
 - パスタ…100g
 - 牛乳…100ml(コーヒー用クリームパウダー大さじ3で代用可)
- ※ニンニクとショウガは乾燥したものやパウダーでもOK



④ トンコツ風汁そばの出来上がり。



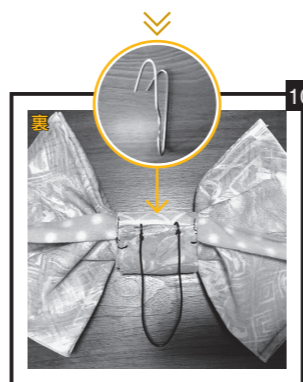
① 鍋に水、チキンスープの素、みじん切りにしたニンニクとショウガと玉ネギ、コショウを入れて煮立てる。



⑤ ニンニクを抜くと、チキンクリームパスタになります。この場合キノコを入れると、とてもおいしくなります。



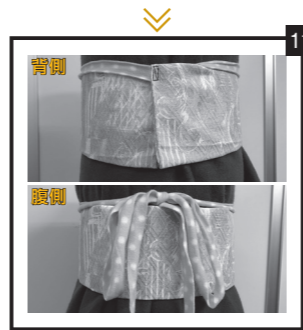
② パスタを入れ、柔らかくなるまで煮る。



⑩ 針金ハンガーを切り、折り返す。リボンの後ろに差し込み、縫い付ければ完成。



⑥ リボン用の布3枚を全て縫い、ひっくり返す(上から横幅が35cm、35cm、25cm(正確には全て2cm減))。



⑪ 【帯の付け方】ヒモをつけた部分を上にして「胸に巻く部分」を胸に巻く。端の片側は、背骨より少しずれる部分に来るようにする。ヒモを腹側で縛る。



⑦ ⑥を短辺で半分折る。35cmの布それぞれでリボンの形をつくり(谷折り状態のままリボンの形になるように広げる)、立体的に2つを重ね、中央をヒモ(40cm)で結ぶ。



⑫ 縛った部分などヒモを全て「胸に巻く部分」の中に入れる。背側に「リボン」の針金を差し、リボンのヒモを腹側で縛り、ヒモを全て「胸に巻く部分」の中に入れる。



⑧ ヒモの部分の上から、25cmの布で巻く。布はリボンの裏側で巻き終わるように調整する。



⑬ 完成。「胸に巻く部分」の100cmの幅を120cmに切り、片方の端を斜め(上が長い)にすると巻き終わりが綺麗です。手縫いするとき、厚地の布は縫いにくいので、注意して縫ってください。



⑨ 巻き終わりの部分をしっかりと縫い止めたら、同じリボンの後ろにヒモ(80cm×2本)を縫い付ける。

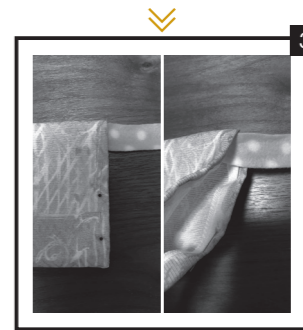
活動に役立つアイデア

簡単浴衣帯の作り方

ナビゲーター = 佐藤節子さん
(SV/セルビア・日本語教育・2016年度2次隊)

「作り帯(結び帯)」をつくる

派遣国の生徒たちは浴衣が大好き。浴衣を学校に寄贈するにしても、帯結びは簡単ではありません。そこで派遣国の生徒たちが簡単に結べる帯をつくって、置いていくことにしました。その「簡単浴衣帯」の作り方を紹介します。

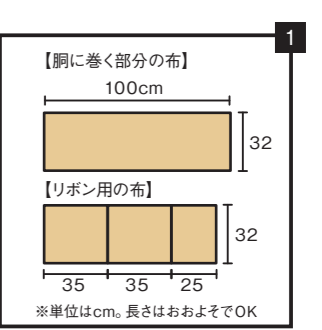


③ 「胸に巻く部分」の短辺の両端にヒモ(100cm×2本)を縫い付ける。

- 【用意するもの】
- 半幅帯…200cm。もしくは、デニムや綿の帆布など厚地の生地を、200×64cm程度。厚地の生地以外のときは芯(接着芯など)を入れて厚地にする
 - ヒモ…約400cm(できれば木綿がよい)。ヒモは100cm×2本、80cm×2本、40cmの長さに切る。
 - 針金ハンガー…1本(針金でもOK)
 - 針と糸
 - 接着剤(ボンドなど)
 - 洗濯バサミやダブルクリップなど



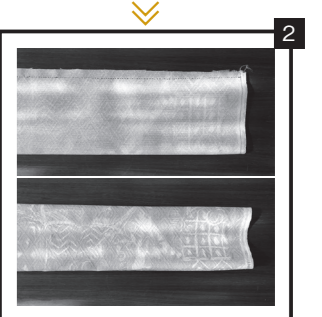
④ 目立たない色の糸でヒモをしっかりと縫い付ける(今回はわかりやすいように黒を使用)。布の両端を縫い閉じる。



① 半幅帯のときは、横幅を上記の寸法にカット。その後、③からスタート。厚地の生地の場合は上記の寸法に切る。



⑤ 【リボン】をつくる。布の切り端を裏側に1cm折り、接着剤で接着する(上写真)。表面を内側にして半分折り、輪と反対側の部分を端から1cmで縫う(上写真)。縫い終わったらひっくり返す(下写真)。半幅帯のときは⑦から開始。



② 「胸に巻く部分」をつくる。表面を内側にして短辺を半分折る。輪と反対側の部分を端から1cmで縫う(上写真)。縫い終わったらひっくり返す(下写真)。

安全対策コラム

犯罪や事件に巻き込まれないよう
安全対策を日々心がけましょう



スマホ タブレット 携帯電話を盗まれないように

スマホや携帯電話（以下、「スマホ等」と記載）が、スリや引ったくり等の手口で盗まれる事案が頻発しています。スマホ等には多くの個人情報が入っているため十分に注意してください。

対策

- スマホ等は魅力的な窃盗対象です。
- 公用携帯電話は特に情報セキュリティの観点からも窃盗・紛失に注意しましょう。
- 往来など人前で通話すると目立つため、狙われます。また通話中は周囲への注意が散漫になるので、他の所持品も狙われます。
- スマホ等はバッグごと盗まれる可能性があるため、ストラップで首から吊り下げた上で服の内ポケットに入れるなどにより身

につけるようにしましょう。しかしポケットからはみ出たり、取り出すところを見られたりするとスリのターゲットになりやすくなります。ポケットに入れて持ち歩く場合はケースに入れて紐と安全ピン等でポケットやベルトと結び付けておくのが効果的です。

●スマホ等を盗られた場合は、通信の契約会社を通じて電話回線を停止してもらってください。待ち受け画面にパスワード設定を行うことも有効です。

健康管理員より 健康管理コラム

心身共に健康に2年間を過ごすために

海外で医療機関を受診するための心構え

海外では、日本とは異なる環境（気候、言語、食事、安全上の行動制限、人との距離など）がストレスとなり、知らず知らずのうちに心身の健康に影響を与えてしまうことが少なくありません。一方で、皆さんの中には、「今まで海外で病気をしたことがないから私は大丈夫」、「一時帰国中に受診を済ませてきたから派遣国で病院にかかることはない」と思っている方も多いのではないのでしょうか。

いつ、どのような状況で医療機関の受診が必要になるかわかりません。事前にできる準備をしておくことは、現地での適切な診断につながります。加えて、受診に対する不安やストレスを軽減してくれます。また、症状が続く場合は、無理をせずに早めに受診するように心がけましょう。

【出発前や一時帰国の際に】

- 現地でも投薬治療や受診の必要がある場合は、日本の主治医から英文診断書をもらい、今後の治療方針やフォロー予定を確認。必要であれば検査結果のコピーを派遣国へ持って行く。
- 服用中の薬剤は成分名を英語で確認し、可能な範囲で1〜3カ月分持参する。現地で同じ薬剤の入手が難しい場合は、日本の医師に代替薬を確認する。
- クレジットカードの使用上限額を確認する。

【海外での事前確認事項や病院受診時のポイント】

- お勧めの専門医や相談しやすい医師を探しておく。
- 事前に病院を訪問し、受診システムや医療費などを確認。
- 受診時、検査結果や健康診断の結果などがあれば持参する。緊張して言葉が出てこないこともあるため、症状や医師に伝えたいこと、聞きたいことなどを受診前にメモしておく。
- 可能な限り検査や診察の結果をその場で理解するように努める。医師の説明や専門用語が難しい場合は、医師に紙に書いてもらい、後で調べる。
- 処方された薬剤の作用・副作用や内服方法、次の受診や今後の治療方針を確認する。

帰国後の進路を考える
帰国後研修、帰国報告・交流会の開催

2018年11月10〜13日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで帰国後研修を開催し、98人の帰国したJICA海外協力隊が参加しました。この研修は、隊員経験を帰国後どのように生かすかをじっくり考える内容になっています。

また、帰国後研修の後に行われる帰国報告・交流会には、隊員の活用に関心を持っている自治体や企業などの関係者が参加し、自治体向けの会に29団体、企業向けの会に68団体が参加しました。この交流会をきっかけに参加自治体・企業の研究を始め、就職に至ったケースも少なくありません。本研修・交流会について、各隊員には帰国直前に在外事務所を通じて案内していますが、進路開拓中の帰国隊員も参加可能です。詳細については、下記メールアドレスにお問い合わせください。

▶JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課

✉ jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

次回の帰国後研修、帰国報告会・交流会の予定

帰国後研修	日程	場所
現職参加者向け	2月16日、17日	JICA市ヶ谷ビル
進路開拓者・帰国後進路決定者向け	2月16〜19日	JICA市ヶ谷ビル
帰国報告会・交流会	日程	場所
自治体・団体向け	2月19日	JICA市ヶ谷ビル
企業向け	2月20日	JICA市ヶ谷ビル

2018年度4次隊の派遣前訓練が開始

2019年1月8日より、2018年度4次隊の派遣前訓練が始まります。駒ヶ根訓練所は、79人（JV=65人、SV=14人）、二本松訓練所は77人（JV=75人、SV=2人）が入所し、SVは、2月11日まで、JVは3月16日まで訓練を受け、その後それぞれの派遣国に派遣されます。（2018年12月13日現在）

【現在活動中の隊員のみなさんへ】
作成した成果品について登録のお願い

JICA海外協力隊が作成した成果品について、ボランティア事業のナレッジの蓄積及び活用による活動支援を目的として2016年より成果品の登録を実施しています。

成果品例は「授業などで使用するオリジナルのテキスト」「授業年間カリキュラム」「料理のレシピ集」「手工芸品等の作成方法」「魚や植物図鑑」などがあります。現在までに約120の成果品が登録されており、活動中の隊員のみなさんへのデータ提供（閲覧）による成果品の活用も進めています。活動中の隊員のみなさんは、「JICAボランティア・ハンドブック」資料部分の「ボランティア成果品の登録について」「ボランティア活動成果品申請FAQ」を参照してください。登録する成果品は様式集の申請書を記入して、在外事務所に申請してください。

より多くの成果品が活用されるよう、ぜひ積極的な申請へのご協力をお願いします。

「JICA海外協力隊」への総称変更と
案件区分の変更

2018年度秋募集以降より、JICAボランティア事業により派遣される人の総称を「JICA海外協力隊」に改めました。事業名称は引き続き、「JICAボランティア事業」です。近年、日本社会でボランティアが一般化し、さまざまな場面で使われるようになる中、「途上国の草の根レベルの開発協力の担い手であり、日本の顔の見える援助の代名詞」として、日本と途上国の信頼の礎となっている隊員活動をより適切に表すための見直しです。

また、従来の年齢区分に代えて、専門性による区分が導入され、青年海外協力隊以外は呼称も変更されます（2019年度2次隊以降）。概要は以下のとおりです。

対象年齢	20〜45歳	46〜69歳
案件区分	青年海外協力隊 ／ 日系社会 青年海外協力隊	海外協力隊 ／ 日系社会 海外協力隊
一般案件 ※幅広い技能・経験で応募可能。 ※応募は「職種」に対して行う。		
シニア案件 ※一定以上の経験・技能が求められる。 ※応募は「案件」に対して行う。	シニア海外協力隊 ／ 日系社会シニア海外協力隊	

Twitterのフォローをお待ちしています

青年海外協力隊事務局の公式SNSはFacebookだけじゃない！Twitterもやっているんです！！

2017年の2月から始まった青年海外協力隊事務局公式Twitter。Facebookとは違った切り口で、JICA海外協力隊の応募や選考、活動、帰国後の事だけではなく、ママ知識やほっこりする話題もやわらかめにつぶやいています。



2018年11月にフォロワー 3000人を突破し、勢いに乗る公式Twitter。フォローはもうお済みでしょうか？ フォロワーがまだの方はこちらから！

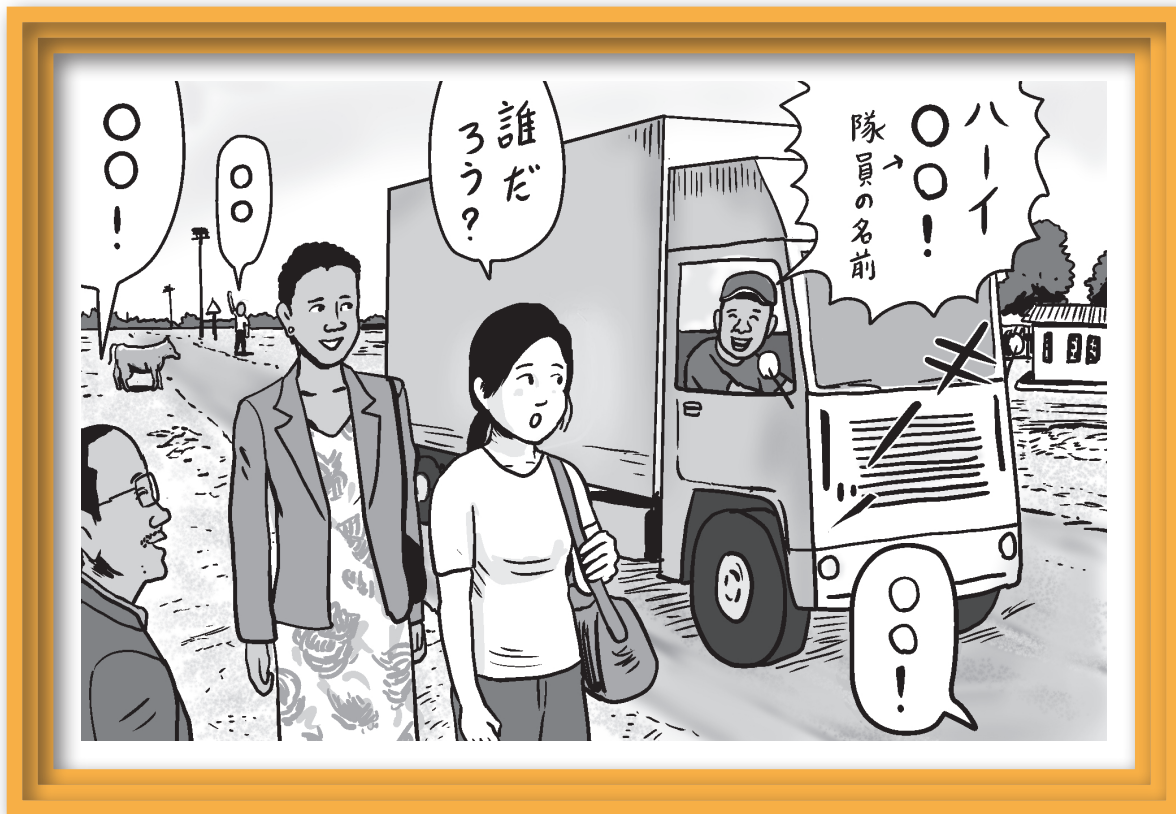
▶JICA青年海外協力隊事務局
公式Twitterアカウント

<https://twitter.com/jocvjimukyoku>



つぶやき

お題 ▶ 初対面



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

驚異の情報網

赴任したの頃、任地の村を歩いていたら突然目の前にトラックが止まり、男性が運転席から私の名前を大声で呼んだかと思うと、颯爽と走り去っていった。一緒にいた現地人の友人に「あら、ボーイフレンド？」とかわかれたが、本当に全く知らない人だったのでポカーンとしてしまった。どうやら現地人同士のロコミで私の名前が広まっているようで、それから初対面の人にいきなり名前を呼ばれてびっくりすることがよくある。どんな経路でロコミが広まっているのか、謎は深まるばかり……。

ペンネーム：村ではキムタクより有名人さん（女性） 協力隊経験者（アフリカ・コンピュータ技術・2016年度派遣）

★ どうも苦手

現地の人の名前を覚えるのはまるで新しい単語を覚えるよう。例えば、自己紹介の中で「アフォーラさん」という名前も、話の途中で「アラフォー？さん」と聞き覚えのある単語に変換されてしまいます。相手から再度名前を聞かれると、やっぱり馴染みのない名前は覚えにくいよね、と共感してくれているかのよう。

ペンネーム：南の国のたけおさん（男性）
協力隊員（アジア・手芸・2017年度派遣）

★ ★ 自分は何者

初対面で名前を伝えるのが苦手だ。私の名前はスペイン語の発音では馴染みがないようで、1回では聞き取ってもらえない。音が似ているから「ケッチャップ」と呼ばれたことも……。でもたまたま、街中で正しく名前を呼んでもらえると、もう少し頑張って伝えてみようと思う。

ペンネーム：えびチリさん（男性）
協力隊員（中南米・小学校教育・2017年度派遣）

★ ★ ★ 現地の人みたい

派遣されて早10カ月。もともと顔は濃い方ではあるけれど、少しずつ日に焼けて、服も現地の伝統的なものを着るように。そんな中、日本から訪れた人に「現地の人みたいだね」と言われ、さらに長い間留守にしていた大家さんにも初めは私と気づかれず、「あれ？ すっかり現地の人みたいになったね～」と言われる始末。だんだん現地の人に近づいていっているみたいです。

ペンネーム：南の島からメルルンさん（女性）
協力隊員（大洋州・助産師・2017年度派遣）

募集中のお題

「ゴリ押し」「日本食」「初耳」「パーティ」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

就職・進学を始め各種情報の提供など帰国隊員の進路決定までをサポート



JICA進路相談カウンセラー／ 青年海外協力隊相談役の紹介



今月の相談 (就活編)

よくある相談に進路相談カウンセラー／
青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 緊張しやすいのですが……。

面接など大事な場面で緊張しやすいのですが、どうしたらよいでしょうか。

A. 「緊張することは悪いことではない」と受けとめましょう

大事な場面で緊張するのは、真面目に取り組んでいる証拠。少々緊張しているくらいの方が、誠実に見えて好感度が高い場合もあります。それに、あなたが感じている緊張感、その3分の1程度しか相手に伝わらない、とも言われています。全然気にすることはありません。緊張していても、自分を見失わず、受け答えができれば良いのです。

そして、準備を万全にして自信をもつことが一番。自己分析や企業研究はもちろんですが、面接練習の相手がいな場合は、鏡を見ながら声に出してみると、話し方(表情や語調)を自分でチェックできます。あとは、あなたらしく自然体で臨みましょう。

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役は面接についての知識も豊富です。面接に不安があるときは、ぜひご相談ください。



うつのみや たみ
宇都宮 民さん(進路相談カウンセラー)

担当地域: 愛媛・高知

✉ jicaskic-cs2@jica.go.jp

2年間の協力隊での経験は財産です。それをどう活かすかは自分次第。よく、「協力隊での経験を活かせる職種にどんなものがあるか」と聞かれますが、どんな仕事に就いても、協力隊活動で身につけたコミュニケーション力、発信力、チャレンジ精神はアピールポイントです。そして、何より、困難にぶつかっても諦めずに取り組んだことで一回り大きくなって、魅力が増して帰ってきています。自信をもって就活に臨んでください。最後に、教員や自治体職員を目指す方へ。協力隊活動に対する優遇措置を設ける自治体が増えていきます。情報収集と準備を万全に! 気軽に相談してください。

●経歴: 地元放送局で10年間アナウンサーとして勤務した後、フリーアナウンサーに。ラジオで協力隊員へのインタビュー番組を企画・制作し、途上国での活動で成長する隊員の様子を紹介している。現在、大学・短大等で話し方やビジネスマナー等の授業を担当。2015年より現職。

いがらししおり
五十嵐枝折さん(進路相談カウンセラー)

担当地域: 石川・富山・福井

✉ jicahric-cs1@jica.go.jp



●経歴: 社会人スタートは富山県内の公立文化施設。総務仕事を20年程経験。2006年に、キャリアチェンジし、キャリアコンサルタントに。教育機関や公的施設で個別相談・グループワークを担当、現在も従事。16年10月より進路相談カウンセラー。

「難しい自己分析と自己理解」。本音を言う、というのはなかなか難しいものです。体験してきたことの「楽しさ」や「喜び」を感情のままに伝える言葉はたくさんあるのに、いざ「そこから得たもの」を伝えようとすると、自分でも整理がつかず言葉はワンパターン。次のキャリアに行く前に、その気持ちに焦点を当て「感情の言語化」をすることは大切な作業で、するとしないとは大きな違いがあります。2020年に向けて、世の中は売り手市場と言われながらも、希望度の高い企業となれば高倍率なのは必至で、むしろ買い手市場。エントリーシートが通らないこともあります。今こそ「興味」「能力」「価値観」をもう一度見直して、自分の可能性の幅を広げてみませんか。自己分析や自己理解を深めるには、他者とかがわかることはとても良いもの。その一助に「進路相談窓口」をぜひご利用ください。帰国隊員の皆さまをお待ちしています。

クロスロード

平成31年1月号 [第55巻第1号 通巻643号]
発行日 平成31年1月1日

編集・発行:
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
TEL: 03-5226-9837 FAX: 03-5226-6379

落丁・乱丁の場合はお取り替えますので、発行元までご連絡ください。

『クロスロード』ウェブ版は以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデア也大募集!

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp





CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



活動当初、「何もできていない」と途方に暮れていました

とよなが まり
文=豊永菜里さん

- ▶フィジー
- ▶コミュニティ開発
- ▶2016年度3次隊

PROFILE

1988年生まれ、大阪府出身。食品関係の商品開発に4年間従事した後、2017年1月、協力隊員としてフィジーに赴任。2019年1月帰国予定。

活動概要

女性・子ども・貧困削減省の女性局西部地域事務所に配属され、女性の地位・所得向上のサポートに従事。主に以下の活動に取り組む。

- 村の女性グループが手掛けているプロジェクト(手工芸品・伝統工芸品の製作、養蜂・養鶏など)の巡回指導
- 商品展示会などのイベントに関する運営サポートおよびアドバイス
- ワークショップの開催(マーケティング、ジェンダー問題など)

私の配属先は、「所得創出プロジェクト」で村の女性たちの所得向上を支援しています。プロジェクトの内容は、手工芸品や伝統工芸品の製作、養蜂や養鶏、養豚など様々で、複数の女性グループによって手掛けられています。私の主な活動は、プロジェクトの現状チェックや運営に関するアドバイスをすることです。

活動当初、プロジェクトに意欲的に取り組んでいる女性グループの少なさに驚きました。プロジェクトに対する意識や優先順位の低さに大きな課題があったのです。一方の配属先はというと、女性グループの活動場所への巡回を提案してみるも、乗り気ではない同僚たち……。どうにかできないかと悩んだ結果、巡回頻度の向上を訴えるだけでなく、自身の商品開発経験を少しでも生かそうと同僚に向けた「マーケティング勉強会」を開催しました。プレゼンテーションの中では、ほかの開発途上国の製品の例を挙げたり、フィジーではこんなコトもできるのでは?と、私なりのアイデアを盛り込んだりしてみました。すると、「このプロジェクトはどうすればいいかな?」「あそこの女性グループでこんなことをしてみたいと思うんだけど」と、同僚たちの方から相談を持ちかけてくれるようになりました。これを機に、年1回だった巡回が年4回(4半期に1回)に増加。年間行動計画にも盛り込み、配属先の業務の一環として定着させることが叶いました。巡回頻度が向上したことで、グループの女性たちへのよい刺激にもなり、「アドバイスをくれるならやら

なくちゃ」「自分たちにもできるんだ」という自信につながりました。内容が改善されたり、再開されたプロジェクトもできてきたほどです。そこからさらに、私のプレゼンテーションをキッカケに、同僚が提出した企画書が承認され、フィジー政府から予算をいただき、新しいプロジェクトの立ち上げにも成功しました。

大きなコトは何もできないけれど、小さなコトの積み重ねが、実を結ぶと実感できた2年間になりました。

＼YELL!!／

ちょっとした知恵のおすそ分けを、
何かの足しにしましょう!

特別な何かをやってもらうでも、やってあげるでもなくて。きっと自分の持っているちょっとしたアイデアの共有が、派遣国のどこかで、誰かの助けになると思います。「やる気のキッカケ作り」、それも協力隊の活動として、ひとつの成果になるのではないのでしょうか。



新プロジェクトとして立ち上がった「モリンガプロジェクト」の開始セレモニーの様子



今月号の表紙
from ブータン



こざと しん
撮影=小里 晋さん
(ブータン・体育・2016年度3次隊)

私の配属先は、ブータン東部、首都ティンブーから車で2日かかるタシガン県の農村にある小・中学校です。十分な用具がないなか、いかに工夫して保健体育の授業を行うかを現地教員たちに提案する活動などに取り組んでいます。写真は、ブータン東部で活動する協力隊員や現地教員たちとともに、保健体育教科の普及・活性化を目的に隣県の小・中学校で運動会を開催した際のひとコマです。リレーでトップのゴールを飾った児童の「わあっ!!」という喜び方が印象的でした。